
Wicked Heart

芹沢 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W i c k e d H e a r t

【Nコード】

N 1 5 8 0 0

【作者名】

芹沢 忍

【あらすじ】

酔い潰れて目覚めると、そこは見知らぬアパートだった。見知らぬ青年の自宅。どういった経緯でこうなったのか、全く記憶にないサラリーマンの木戸靖弘は大いに戸惑っていた。そんな木戸に青年 的場一志は簡単にどうしてこうなったかを伝えると、いきなりキスをしてきて……

突然の出来事で右往左往しているリーマンのお話です。

s c e n e . 1 (前書き)

BLです。ダメな方は回避願います！

目が覚めると、そこは見知らぬアパートの一室だった。体を起こし、周囲を見回す。夜明け前の薄青い光が部屋の中を微かに浮かび上がらせている。

六畳間に一組の寝具。小ぶりなカラーボックスに詰め込まれたボロボロの参考書たち。立てかけられた折畳み式のロー・テーブルと積み上がった座布団数枚。奥にはもう一部屋あるようだが、襖が閉じていて様子は判らない。その反対側にはすりガラスの引き戸。薄っすら浮かぶシルエットから、どうやらダイニングらしいのが窺えた。

そして、認めたくはないが、現在いる布団の盛り上がり方からして、どうやら同衾している相手がいるらしい。正直に言って、この経緯の記憶は全く無い。ただ、有難いことに自分は服を着ている。ひとまずヨシ！ と胸を撫で下ろした。

相手はまだ夢の中。ここはこっそりと逃げ出すべきか、それとも宿の提供に礼を尽くすべきか。

俺がハムレットさながら真剣に悩んでいると、相手が身じろぎ布団の中から腕を伸ばしてきた。ポスっ出した腕の先にごつく大きい手の平。随分と遅い。

おや？ 遅しい？ 掛け布団を被った相手は男か。

「それじゃあ、間違いは無いな！」

小声でそう言って、うしっ！ と俺は思わず拳を握り締めた。

「間違いつて？」

くぐもった声が聞こえ、掛け布団がモゾモゾと動くと、そこから相手が顔を出した。現れたのは真面目そうな感じがする好青年だ。

この顔は見覚えがあった。記憶を手繰って昨夜の様子を浮かべる。

「あ、居酒屋の兄ちゃんか」

何度か酒と摘まみの追加注文をしたが、その都度彼が注文品を運

んで来ていたのが彼だった。まあ、小さい居酒屋で店員も少なかったからだろうが。そう言えば居酒屋で飲んでた途中から記憶があやふやになっている。

酒で記憶が飛んだか。

望んでいたことではあったが、居酒屋の店員に迷惑を掛けるとは予想もしていなかった。

布団の中の彼は大きく伸びをしてから起き上がる。まだまだ成長途中という感じの、ひよろつとした体型にTシャツ姿。欠伸をしながらガシガシと頭を搔いてから真面目な顔で再び聞いてきた。

「で、間違いつて？」

俺は視線を彷徨わせ彼の顔を見るのを避けながら歯切れ悪く答えた。

「その…… 君が女の子だったらさ、やっぱり、なんだ、ホラっ！」

判るだると、無責任に相手に目で理解を求める。置いてあった参考書から判断すると、彼は高校生だろう。男の生理機能くらい理解出来る年齢なんだから、直に言わなくてもいいだろうという甘え考えだ。真面目そうだから空気を読んで察して欲しいと願う。

「ふ〜ん。覚えてないのか」

予想外の言葉に胸がドキリとする。……何かやったのか、俺は。

「あんたが人肌恋しがって抱きついてさ……」

「俺が！」

酒に吞まれたうえに、そんな醜態を晒すとは！ しかも、人肌恋しくて抱きついたって…… いくら三年付き合った彼女にこっぴどく振られたからとはいえ、まさか自分が男に手を出すなんてありえない…… と思いたい。

目の前の相手をじつと見る。大人の男に比べれば幾分華奢な印象ではあるが、別に女性に見えるわけではない。それでも、昨夜、記憶とおそらく理性も手放し放題だった自分が何をしたのか非常に不安であった。そこで、恐る恐る先方にお伺いを立ててみる。

「もしかして、いや、それは無いと思うが……」

俺はそこで言い淀む。しっかりしろ、自分！ と励ますが、問う内容が内容なので、後ろめたく自然と顔が俯いてしまう。知らないうちに正座をしていたらしく、握り締めた拳が目に入る。その手を見つめながら、短時間、自分の中で思考がループしていたが、意を決し己の顔を上げた。すると腹を押さえながら笑いを収めようと奮闘していたらしい青年の姿が目に入った。

「何で笑ってんだよ！」

逆ギレだろう…… 怒鳴ってから小さく自己嫌悪する。年下相手に押さえが効かない。これじゃあ、ダメな大人だ。そんな俺を見て、彼は笑いを飲み込みながら言った。

「だって、顔に出てる。理性に自信無いつて、その姿勢とか、視線が……」

そして、今度は収めることなく大爆笑だ。布団で転げるようにして笑いのた打っている。

俺は姿勢を改め正座をして俯いている状態。確かにかなり滑稽だが、相手の賑やかな笑いに、正座のままの俺は己の顔が引きつっているのを感じていた。

このガキは俺の誠意をお笑いと思ってるのか。さっきの俺の反省は無駄か。漫画表現だったら怒筋と青筋がきつと顔に浮かんでいる。フツフツとたぎった怒りでその場を離れようとする俺の腕に彼の手が触れた。視線を落とすと笑いを消したマジな顔がある。不意打ちを食らったように俺はポカンとその顔に惹かれた。

上半身を起こした彼の手に力が入るのを腕に感じたと思ったら、その手が俺の腕を引き寄せた。重心が前へ寄り、自然と彼の方へ身体が振れる。一度、肩の辺りで受止められたかと思ったら、彼はいきなり俺の顔へ自分の顔を近付けた。

頬の辺りを唇が撫でる。その後は迷わず口元へ。一度軽く唇に触れてから、間髪置かず舌が深く歯列を割ってきた。丁寧に丹念に口内を探られる。痺れるような刺激が舌と腰に来る。頭の隅ではキスが巧いというのはこういうことかと、妙に冷静に判断をする自分が

いた。

そう、やたらに巧い。この刺激でかなり体が熱くなり力が抜ける。相手にやり返すという意思が生じるよりも、このまま刺激を受けていたいという感覚の方が勝っていた。

我に返ったのは唇をずらした時に出た、自分の微かな喘ぎが聞こえた時だった。

瞬時に相手を押し返し身体を離す。感覚は引き離されることに不満を漏らす、感覚に合わせたら、この後どうなってしまうか判らない。名残惜しげな自分の深い部分が信じられなかった。

乱れる息気付かれぬよう必死で静めていると彼が言った。

「これ以上はしてないです」

両手を上げて自己申告する姿は悪戯を告白した普通の高校生そのものだ。先刻の手慣れた行為をしていた奴とは微塵も思えない。だが残念ながら手慣れた様子は現実だった。現に俺は腰が砕けて半身に力が入らないのである。

「お前、幾つだよ」

今まで口付けとは男という立場上、自分がリードしていたこともあり、受けた衝撃はかなりのものだった。ある意味シヨックだった。コイツは確実に自分よりキスが巧い。年上としてというか、男としてのプライドが傷ついた。まあ、年下の男に酔い潰れを介抱され、あまつさえ、自宅にまで厄介になった時点で、既にプライドも何も無いわけなんだが。

負け惜しみで思わずどうしようもない馬鹿な台詞を投げた。しかし、彼は余裕な感じでこう答えたやがった。

「あ、もしかしてかなり良かったりした？」

挑発的に笑う顔は、まだ、あどけなさが残る。あまり遊んでいないような様子も無いのに手慣れたキスをする青年。そのギャップに戸惑う。プチ・パニックの俺にお構いなく、彼は話しを続ける。

「家に着いて寝かせようとしたら、抱きつかれてキスされたんだよね。で、そのまま靖弘^{やすひろ}さん、パツタリ寝ちゃったから。今のはその

「返し」

そんな経緯か。寝落ちした自分はある意味偉かった。でなければコイツ相手に何か仕出かしてたな。

はあ〜と大きく息を吐き、俺は警戒して強張った体の力を緩めた。そうしてから気付く。今、俺の名前を聞いた気がするが……

不思議そうに相手を見返すと、青年はやんわりと笑顔を見せた。

「あ、気付いた？ 昨夜『メールで説明なしに、靖弘さんにはもう会えないって、酷くないかあ!!』って、元カノに文句言ってたからさ。しかも一人で怒鳴ってた」

「……最悪だ」

何が最悪って、酔ってそこまで話した自分が最悪だ。頭を抱え込んで唸る。今後は何があっても外での深酒は禁止だ！

「靖弘さん？」

凹んでいる俺を見かねてか、彼が遠慮気味に声を掛けてきた。その呼び方に不愉快を感じ、俺はぶつきら棒に苗字を告げた。

「…木戸」

「きど？」

「苗字。名前で呼ばれるのは抵抗があるから」

正直に言う。名前はかなり親しい人が特別な人にしか許したくないというのもある。チラリと相手を見返すと、彼はハツと何かに気付いたような表情をした。

「自己紹介してなかったよね。的場一志まどはるかずし。あ、呼び方は一志でいいよ。一応受験生です」

「受験生なのにバイトって余裕じゃないか」

ボロボロの参考書や問題集。バイトも勉強も頑張っているのが窺えるのに、つい意地の悪い台詞を吐いてしまう。それなのに目の前の青年は笑顔で言った。

「食ってかないといけないからね」

大学進学準備かなにかだろうなと思う。俺にも覚えがあった。

青年は話しを続けた。

「バイト先であんたが手を離さないから、店長が自宅に持って行って」

持ってけというのは、あんまりな表現だ。

「でも、高校生の自宅に持って、いや、連れていけって言う店長ってさあ……無責任じゃないか」

ぼやくと青年はコホンと咳ばらいをして俺の気を引いた。

「うちには可愛い嫁さんと、幼い子どもが二人もいるんだあ！こんな得体の知れないものを持ち帰れる訳がないだろう！」

バイト先の店長の真似らしい。

悪戯っ子のようなその顔に、逆立っていた気持ちが緩む。

完敗。そんな言葉が脳裏に浮かぶ。プライドの為に意地を張っている自分の方が子供染みている。そう思ってしまうと自然と顔が笑んだ。

「ようやく笑った」

青年がほっとしたように笑う。その様子で俺は気を使われていたらしいのが判った。

「何だか色々世話になってしまったなあ」

気が抜けたこともあり、自分でも驚く程、素直に言葉が流れた。

互いに寝具の上でくつろいだ姿勢を取りながら向かい合う。

「何か礼をしないとな」

そう言うこと一志は少し戸惑った顔をした。

「どうした？」

「いや、ちよつと悪さしたんで、お礼って言われても……」

アレか！あまり触れたくは無いんだが……

行為を思い出して思わず口元に手をやる。思い出したら妙に生々しく感触が浮かんできた。顔に朱が昇る感じがする。

「まあ、あれは、そう！デカイ犬に舐めまわされたとも思っておくぞ」

冷静に判断したら舐めまわされたって表現が妙にエロい気がしてしまった。真向かいにはその相手がいて自分は見られている。尚更

顔が熱く火照る。逃げ場は無い。せめてもと思い、顔を横に向けた。しかし、くすりと小さく笑う気配を感じ、足掻いたのが全くの無駄であった事を悟る。

「首まで赤くなってますよ」

「言っちな！」

救いを求めて外へと目をやるが、当然ながら救い主なんていないわけがない。が、まるで救い主が現れるかのように、明るい日差しが射していた。

「あ、空明るいわ」

すっかり夜が明けていたようだ。昨日は金曜だったから休みだが、ここに長居をするわけにもいかない。立ち上がりズボンとシャツの皺をのばす。

「帰る？」

ああ、と返事を返し近くを見回したが、上着と鞆が見当たらない。一志が立ち上がると擦りガラスの向こうのダイニングへと向かった。きちんと片付いたキッチンにテーブルと椅子。椅子の背もたれに着せ掛けてあるのは俺の上着だ。一志はそれを取り上げると無造作に手渡した。

「皺にはなっていないと思うけど」

立ったまま真正面で対面すると、一志は俺より頭半分背が高かった。成長過渡期の中にある為か、全体的にアンバランスな感じがする。自分も十代の頃はそうだったのだろうか。マジマジと見つめながら、渡された上着を羽織る。

「酒臭い！」

ふわりと香ったのは濃厚な日本酒の臭いだった。

「臭い取れなかったね。一応、拭いて消臭剤振りかけておいたんだけど」

「……」

「でも、木戸さん自信も物凄く酒臭いから」

本当に遠慮が無い。まあ、コイツの性格なんだろうなと思うよう

になったから、もう然程気にはしないつもりだけれども。それでも、表情は仏頂面になっているような気がする。

「あ、そうだ」

俺は着込んだ上着の内ポケットをまさぐり、持ち歩いている名刺入れを探す。携帯の番号とアドレスが印刷されたものだ。そこから一枚抜き取ると、取引先に対応するように一志に手渡す。

「以後お見知りおきを」

一志はそれを受け取り、思慮深いとも見える表情をした。
「どうした？」

先程までとは異なる影のある表情。俺は何かまずい対応をしただろうか。しばし続いた沈黙の後に、一志が重く口を開く。

「……名刺って、初めてみたかも」

ガクリと力が抜けた。深刻に受け取った俺は馬鹿か？ 学生なんだから、名刺なんて貰い慣れていないものをマジマジ見るのは当然じゃないか。

まだ名刺を見ている一志に、俺はアポイントの念押しをするように言った。

「お礼、次回会う時までを考えておいてくれよな。事前に連絡くれれば調正するから」

弾かれたように顔を上げた一志は、心底驚いている様子だった。

「本当にいいのかな？」

「介抱してもらった上に、泊めてもらったんだから。遠慮はしないでいい」

「でも……」

「それ以上は聞かん！」

さっきの蒸し返しは嫌なので、ぴしゃりと会話をシャット・アウトし、椅子の上にある鞆を手に取った。玄関に移動し、きちんと揃えあつた靴を履く。そうして振り向きもう一度念を押した。

「連絡待つてるぞ！」

一志は名刺を片手に持ったまま、空いた手の方をヒラヒラと振っ

た。外まで見送る気は無いらしい。何だか物足りない……って、思うのは何でだ？ 自分が今思った事に何故かイラつく。

戸が閉まる瞬間にチラリと一志の顔が見えた。淋しげに見えたのは俺の思い過ぎだろうか。正直、一志は大胆なんだか、遠慮勝ちなのか良く解からない。

「アイツ、連絡してくるかな」

朝の陽ざしに目を細めながら考える。縁が続くかどうかは、一志の行動次第だ。

とんでもない出会いではあったが、失恋で疼いていた筈の胸の痛みが和らいでいるのは確かに一志のおかげだった。

連絡をくれればいいのにと、心の奥底で小さくそれを望んでいる自分がいた。

scene・1 (後書き)

木戸さんは書き始めたら思ったよりも女々しい殿方でして、予定していた通りに動いちゃくれません。

この分だと、自分の中では少々長い話になりそうです。本人にもどれくらい続くのかまだ判りません。

どうしようもなく根暗なお話しになりそうですが、お付き合い頂ければ幸いです。

一志と再会したのは十日程過ぎてからだった。会社に入ったビルを急いで出ると、不意に肩を叩かれたのだ。振り返ると人懐っこい笑顔を見せて彼が立っていた。想定外の現れ方に驚いたのもあったが、それよりも再会出来た事が単純に嬉しかった自分に驚いた。

学校の帰りなのか制服姿だ。珍しくなりつつある詰め襟の学生服が、どこことなく窮屈そうに見える。マジマジと俺を見てから、彼はおもむろに言った。

「木戸さんって、そういう格好だといかにも大人の男って感じた」
 さすがに痛い。先日の姿は大人気無かったとは言え、この口ぶりだとあまり年上には見られていないようだ。舐められるのも嫌だと思ひ、一応年齢を暴露してみる。消極的な言い方ではあるけれど。

「……俺、三十路に入っただけだなあ」

「え？ そんなに行ってたんだ。おっさんじゃんか！」

「おっさん言うな！」

おっさん扱いは却って先程よりも痛かった。言わなきゃ良かったかと後悔して黙り込んでいると、肩口の辺りで声がした。

「そんな感じでむくれてると、あまり年上って感じに見えないですよ」

もしかして年下に見下されてる？

俺より頭半分身長が高いんだと改めて感じ、身長だけでなく何となく他の部分に關しても見下されているのではないだろうかと自虐的に思ってしまった。初対面が酷い有様だったから尚更だ。

「この前会った時の格好だって、とても大人って感じじゃなかったし。うちの店に来た時点でヨレヨレだったでしょ？ 今みたいに髪だって上げてなかったし、ネクタイゆるゆるだったし。ウダウダ言ってる内容も俺らの年代の愚痴と変わらなかつたし」

一志からの容赦ないコメントに言い返せない。

「考え方とかも俺らと大して違わないんだなあって思ってた」
笑われているのかと思つて一志を見たら、意外や意外、無表情である。

「大人つてのに失望したか？」

一志は首を振りポツリと漏らす。

「大分前に失望してるから、別にそれは気にならないけど」

コイツ、若いくせに何かと悟り過ぎている。

そう思つた瞬間、先日世話になつた部屋の様子がふと浮かんだ。
何かが引つかかる。

別れ際、夜明け過ぎた時間だつたよな。でも、部屋にいたのは一志だけだつた。一人暮らし……にしては間取りが贅沢な気もする。

ある憶測が胸を過ぎる。

「もしかして、お前の家族って……」

つい、言葉を濁す。間違つていたら無駄に傷つけるだけだ。言い淀んでいる俺を、一志が済まなそうに見ているのが目に入る。視線が絡むと、彼は複雑そうな顔で笑つた。

「母子家庭なんだよ、うちは」

そうして間を置いてから言つた。

「母さんは夜の仕事で明るい間しかいないんだ」

やはり片親だつたのだ。いやに大人びていると思つていたが、多分、大人にならざるを得なかつた環境なのだろう。

名刺を見ていた一志の暗い顔を思い出す。父親の事を考えていたんだらうか。

胸の奥が針を穿たれたようにチクリと痛んだ。

思つた事が表情に出してしまったのだらう。一志がそれまでの重さを払うように明るい声を出す。

「ごめん、暗い話をしちゃつたね」

何事も無かつたように気を回して言う姿が痛々しい。無理……しているんだらうな。そうは思つたが、ここで変な気を回しても仕方がない。ここで一志の気遣いに合わせてやらなければ、コイツはま

た輪を掛けて自分の本心を殺して笑うんだろう。思い切り話題を変えなければと、俺は浮かんだ疑問をぶつけてみることにした。

「いきなり会社の前で待ち伏せるなんて、俺がもし出張とかでいなかったらどうするつもりだったんだ？」

「一時間くらい待つてみて、出てこなければ諦めるつもりだった」

一志が不貞腐れたような顔で睨みかえしてきた。思わず怯む。学ランのポケットに手を入れ一志が何かを取り出す。

「……メール。貰った名刺のアドレスに送ったら返ってきたよ」「え、マジか？」

一志に突き出された名刺を見て頭を押さえる。……前のアドレスだ。全部取り換えたと思っていたのに、まだ古いのが入っていたのか。

「悪い！ これ前の名刺だ」

そう言つて拝むように両手を合わせる。

「会社に電話するにしても、何て言つていいか判らないから待ち伏せしました」

腕を組んでそっぽを向かれる。こんな拗ねかたは年よりも幼い感じがする。案外可愛い所もあるもんだと俺は思わず笑つてしまう。

「何かおかしい？」

そうして一志は益々むくれた。

「子供っぽい。こっちの方が断然いいわ」

笑いながら、つい言つてしまう。一志の顔が真っ赤になる。その様子が無性に嬉しいのは、初めて彼より優位に立てた気分になったからだけだろうか。

キュルルル……

高く賑やかな音が鳴る。一志が音に気付いて俺の腹を見た。俺の腹の蟲からの催促だった。

そう言えば今日は昼を食い損なっていたんだっけ。そうだよ、だから急いでたんだった。

「……あのさ、飯食いながら話さねえか？」

まずは鳴き始めた腹の蟲をなだめなければ。ついでに一志も食事に誘う。

学生服だからファミレスとかでいいだろうと、近場の大手チェーン店に場所を移した。

席に落ち着くなり一志が図書館から借りたらしい本を鞆から取り出す。

「お礼、本が欲しいんだけど。いいかな？」

一冊の薄いハードカバー。見覚えのある装丁。俺はその本を知っていた。

「自分で買うにはハードカバーってちょっと高くてさ……」

高月悠って作家の本だ。繊細で美しい、それでいて残酷な物語。

かなり特殊な作風で、一応メジャー作家ではあるが、多分、一般にはあまり受け入れられないんじゃないだろうか。この作家は本の装丁やイラストも拘っているらしく、出版社が異なっても殆ど一人の人物にそれらを任せていている。自分の世界を揺るがせないそのスタンスもが魅力的だ。

「お前、高月悠が好きなのか！」

思いがけず大声が出た。メニューを持って来たウエイトレスが、メニューを床に落とすようになったくらいだ。身振りでウエイトレスに詫びてメニューを受け取る。

これはまた笑われるな。チラリと見る、とやはり一志は苦笑している。コイツには格好の悪い所しか見せられないんじゃないだろうかと思い、そんな自分の考えに軽くダメージを受けてしまった。

失態やそんな考えを誤魔化すようにメニューを開くと一志に差し出す。

「好きな頼んでいいから」

それからもう一冊のメニューを自分の為を開く。ページをめくっているとは何となく視線を感じた。顔を上げると楽しげな表情がある。

「何だ？」

「木戸さんって、本当に判りやすい人だなあと思って」

「黙って選べ！」

やっぱり舐められてるとしか思えない。

空気を読んで一志は黙ったまま大人しくメニューを決め、つつがなくオーダーを済ませてから、ようやく先程の話の続きに入った。

俺は本を受け取ってパラパラとページをめくる。気に入っている短編集だった。

「この作家って好き嫌い別れるんだよなあ。俺は大好きだけど、周りには表現が大嫌いってのばかりでさ。だからさつきは、つい嬉しくなっちゃまって」

と、何気に言い訳を試みる。

「確かに残酷な表現が多いけど、それがメインじゃないから」

「解かってるじゃん！ で、お前は どうして気に入ったんだ？」

つい、身を乗り出して聞いてしまう。すると少し考えながら一志が語った。

「この作品を書いた人って、傷みを知ってる人なんだって感じたからかなあ。『狂犬』^{くるいぬ}は残酷な殺人を犯した少年がどうしてそうなったかって話でしょ。平穏な暮らしが段々崩壊して少年は悪夢を見て狂ってく。『鬼』はどうして実の子供を食わなきゃならなかったのかって話だし。描写だって物凄く残酷で、罪を犯した人間を非難したいくらいな犯罪のはずなのに、何でかなあ、仕方がなかったんじゃないかなって、納得させられちゃうんだ。そう感じるのには罪を犯した人の持つてる傷みを、作者が、本当に自分にあつた事みたいに感じて書いているからじゃないかなって思ってる。でも、巧く言えないや」

「いや、良く解かる。そうなんだよ。何て言うんだ？ 切々と響いてくるキャラクターの心情とかが泣けるんだよ！」

いや、だから熱くなり過ぎだろう、俺。就職してから同じ作家を好きだと言う人間に出会ったことが無かったから、押さえが全く効かない。

「まだ、二・三冊しか読んでないんだけど……」

一志が言い淀んでから考え込む。何を言つのか続きが無茶苦茶気になって仕方がない。

「他のも読んでみたいと思ってる」

読み仲間を見つけた喜びがヒシヒシと胸に広がる。となると、次は営業に走るに限る。

「全部持つてるから貸そうか？ それで気に入ったの買ってやるわ」

「……木戸さん」

「ん？」

「よっぽどこの作家さんが好きなんですね」

しみじみと口に出されるとかなり恥ずかしい。そうだよ、好きだよ！ と思うが、口には出さない。代わりに咳払いをして自分を鎮める。出来るだけ落ち着いた感じに見えるようにと、今更な努力を試してみる。

「ああ、まあな。で、今度の休みにでも本を取りに来たらどうだ？」

不思議そうな表情で一志が俺を見る。

「何で？ 今日じゃいけないの」

「……社会人には社会人の都合があります」

要は部屋が汚な過ぎて、客人が招けない有様だということだ。察して欲しくないが、コイツは勘が良さそうなので、バレてしまいうるな気がする。

一志の反応を気にしながらグラスの水を飲み干す。

「日曜なら昼過ぎかな」

それだったらこつちも都合が良い。土曜に片付けを済ませられる

！

「解った。昼飯食ってから見に来るか」

「そうだね。食べてから行くよ。一時頃でどうかな」

「それくらいだったら、俺も朝ゆっくり出来るから助かる」

こうして今回は互いにしっかりと再会の約束を交わした。

週末までには部屋を片付けなきゃいけないという面倒な仕事が生じたのは、取りあえず棚に預けておくとしよう。

「お待たせしました」

タイミング良くウエイトレスが料理をテーブルに並べ食卓の準備が整った。

s c e n e . 2 (後書き)

本のお薦めで調子に乗ってます。殆ど自分が好きな本に対する反応まんまです。自宅には招きませんけどね (^| ^ ;)

木戸っちが少々軽い感じですが、好きなものに対してノリノリなだけで、普段はそんなに軽い人じゃない……はずです！

日曜日。自宅の最寄り駅で待ち合わせたので一志を迎えに行く。

昨日はかなり大変だった。社会人ともなると、結構生活はいい加減になったりする。特に今はフリーの身の上になったばかりだ。気が抜けきっていたため、スーツとシャツはそこら辺に放置。自分で洗濯するものは洗濯カゴに入れてはあるが、靴下がだらしく引っかかっていた。居間にしている和室の机はコンビニ弁当の残骸が置きっぱなし。覗かれはしないだろうが、寝床のロフトには棚がある癖にそこかしこに本が散乱していた。まともなのは殆ど使っていない仕事部屋衣裳部屋（という程服も無いのだが）だけという有様。正直、どこから手を付けていいやらと途方に暮れた。スーツとシャツは取敢えずクリーニングへ出し、洗濯物は当然、洗濯機の中へ。弁当の残骸は袋に詰め込み、回収日まではベランダへ退避。本はくだんの作家本のみを和室へ移動させ、他は本棚へしまった。部屋の各所にふんわりと積もった埃どもは掃除機へ強制退去。とまあ、かなり頑張って片付けたのだ。

「思ったより片付いてるんだ」

開口一番そう来たか。世間的に考え、独り身の部屋は乱雑だってイメージがあるのか、はたまた、自分を顧みてそう思うのか。……いや、コイツの場合、自分を顧みてるのは無いかと、先日訪れたすつきりと整理された部屋を思い浮かべる。

玄関で辺りを物珍しげに見渡しながら一志が靴を脱ぎ上がり込む廊下を過ぎ和室へ案内すると一志は部屋を見上げて立ち止り眼を丸くした。

「何で和室にロフト！」

「面白いだろっ？」

「しかも立てるんじゃない？ あの高さだと」

早速、立てかけてある梯子に登ろうとする。いきなり子供っぽい

好奇心を剥き出しにするな！ 俺は慌てて止めに入る。

「おい、待て、そこは寝床なんだから！」

「エロ本でも積んであるの？」

「ねえよ」

「じゃあ、いいじゃん」

一志はためらうことなく梯子を登る。そして登りながら持っていたバッグを俺に放り投げた。おいおい、これは無いんじゃないか。しかも、何気にタメ口だったぞ。俺は頭を押さえるしかない。

上がったも、あるのは敷きっぱなしで寝乱れたままの蒲団だ。面白くも何ともないだろうに。しかし、ロフトは本を片付けただけなので、覗くのは勘弁して欲しかった。

「広い、立てる！ うわ、本棚まであるよ！」

大騒ぎしながらひとしきりロフトを堪能し、一志は降りてきた。

「お前、遠慮って言葉が頭に無いのか」

つい説教モードに入る。しかし、その熱を一志はあっけなく消してしまった。

「初対面の俺に思いつきり迷惑掛けたのに比べたら、小さなことじゃない？」

そのことを持ち出されると立場が弱い。

「あとはどんな感じかな」

梯子を降りた一志が、すぐそこにある襖を開ける。

……もう好きなようにさせよう。諦めの境地といった心境で俺は天を仰いだ。

「フローリングだ！ わあ、生活感無い！」

「仕事部屋だからな」

「でも使ってなさげ」

凶星だよ。仕事もついで和室で済ませてしまっからだが。

「もう満足しただろうが！」

部屋に踏み込む寸前にTシャツの襟首を掴んで和室に引き戻し、不平を述べるのを無視して、本を積んであるローテーブルの前に座

らせる。

「大人しくしとれ！」

一志が身を竦めながら本に手を伸ばしたのを確認して、俺はキッチンへ移動した。

今日は温かいものの方がいいだろう。マグカップとティースプーン、インスタント・コーヒーのボトルと紅茶のパックを鷲掴み和室へ持ち込む。

戻ると一志は黙々と本を読んでいた。邪魔をしても悪いと思い、静かにポットを引き寄せコーヒーと紅茶を一杯ずつ入れる。立ち昇る湯気と共に、コーヒーの香りが漂う。それに気付き、一志が本から顔を上げた。マグカップを二つ差し出すと一志はコーヒーを受け取った。

「ありがとうございます」

一口啜ると顔をしかめる。濃過ぎたらしい。

「ミルクいるか？」

「……頂きます」

「砂糖もいる？」

これには首を振った。ローテーブルに備えてあるスティックタイプのパウダークリームを二本ばかり取って差し出す。一志は二本分のクリームをまとめてマグカップに注ぎ入れてからティースプーンで攪拌した。改めてカップに口を付けると、ふっと表情が和らぐ。今度は満足したらしい。

たゆたう湯気と香り。その中、先程の騒ぎっぷりとは異なる、静かな時間が流れる。部屋に響くのは一志が本をめくる際に生じる摩擦音だけだ。

何だか落ち着かない。かと言って話題にするのは本のことか、あの時の話題くらいしかない。

思案の末、俺はあの件に触れてみることにした。先日のキスの件だ。あれから判断するに、多分それ以上の体験もかなり慣れていそう……に思える。自分が受けた衝撃よりも、健全な男子としては体

験談の方に興味がある。俺はそろそろと一志に声をかけようと試みた。

「その、何だ。お前って、歳の割にはああいった事に慣れてないか？」

一志が顔を上げる。少し怪訝な顔をしたが、問うた内容に思い至つたらしく、ああ、と低く漏らす。唐突だったかと、俺は気不味くして視線を逸らせた。

「場数はきつと、あんたよりは踏んでるよ」

固い感じの声が答えを告げる。想像通りであつたが、見ると彼は思いのほか真顔で言葉を返していた。

「母さんの職場の姉さん達が、淋しいって人肌を恋しがるんだ。中が上がった頃からかなあ。その頃、俺って既に標準よりもかなり身長が高くて、姉さん達よりもデカかつたんだ……」

そうして痛そうに顔をしかめた。

「俺も淋しかったし、姉さん達も淋しかったんだ」

暗い影が瞳に宿る。

「行為には溺れてたよ。互いに相手をしてくれるなら誰でも良かったし。寝てる間は独りじゃないし」

未成年の言う言葉ではない。もっと歳を取って擦れた大人が口にするような台詞が目の中の青年から漏れる。現実なのかと自分の耳を疑いたくなる。

「でも、中学生と大人だろ。犯罪だぞ」

感情が荒立ち自分の言葉が震えているのが判った。

「そんなの誰かがチクらなきゃわからないよ」

そうして一志は醒めた顔で笑う。痛々しい笑顔が俺の胸を握り潰す。

「でも、お前の母親だつていただろう。……その、同じ家に住んでるんだし」

「……母さんが姉さん達に俺を薦めてたんだ。慰めて貰いなって」
言葉が出なかった。

「だから、俺はあの家を出る」

強い口調。伏せた瞳は強い意思を宿していた。

部屋のボロボロになった参考書。居酒屋のバイト。みんな家を出るための準備だ。初めて出逢った時のあの「食ってかないといけな
いからね」という台詞にはこんなに重い意味が含まれていたのかと、
俺は愕然となった。どうしたらいい。こんな時はどうしてやったら
いいんだ。気持ちは焦るばかりだ。

ふと一志が顔を上げた。色の窺えない瞳。だが、それは一瞬に垣
間見えただけだった。瞬時にいつもの色が宿る。その落差が切ない。

普段の陽気さは甘えを許されない者が被る仮面なのだろうか。

そう思い至った俺は、自然と一志の頭を腕に抱き込んでいた。

「お前、俺と一緒に暮らすか？」

不意に零れた台詞に自分で驚く。何だ？ この下手な同棲の誘い
のような台詞は。いやいやいや、これはそういうのでは無いからと、
心の内で盛大に首を振る。じゃあ、何でだ。家を真剣に出たいと思
っている一志に協力したいからだ。友達がそんな事を言ったら、家
を出る協力をするだろう？ そう、そんな感じだ。俺は結構一志が
気に入ってきているのだ。だからこの台詞もアリだ！ 自分で自分
に説明をしてるのが何だか滑稽だが、ある程度行動に納得がいった。
それから改めて冷静に今の状況を考える。胸元には一志の頭がも
たれかかっている。しかも、その頭を俺は抱き込んでしまっている。
……俺はこの後どうすりゃいいんだ？

膝立ちしたまま身体は固まっているが、鼓動は跳ね上がり背中に
は妙な汗が伝う。身動き出来ない。抱き込んでしまった手前、突き
放すのも不自然だ。無言のままリアクションに困ってる俺を助ける
かのように声が聞こえた。

「迷惑はかけたくない」

小さく消え入りそうな声だった。胸から頭を離す一志が目に入る。
俺はゆっくりと絡んだ腕を解いた。俯いたまま一志が身を引く。

「木戸さん、優しいね」

膝の上にあつた本を静かにローテーブルへ戻すと一志は立ち上がり、先程俺が部屋の隅に置いたバッグを取りに向かった。

「今日は帰るよ。本は借りてくね」

そうして読みかけの本と、もう1冊を選び取りバッグへ仕舞い込む。

「おい、帰るつて、来たばかりだろう」

バッグを肩に掛け部屋を出ようとする一志の後を追い腕を咄嗟に掴む。

視線が交わる。さつきと同じ、色の窺えない瞳。拒絶されていると感じた。それが油断になった。力が緩んだ隙を突いて、一志が俺の手をすり抜ける。ここで離れたら二度と会えないんじゃないかと思ひ、俺は慌てた。

「お前、さつきの返事は！」

口を突いた言葉に一志が立ち止る。

「木戸さん、俺をどうしたいの？」

背中を向けたまま一志が言う。その意味が良く解からない。

「俺に同情したの？」

「それは無い！」

即答する。一志が振り向く。俺は先程思つた事を告げた。

「お前は家を真剣に出たいって思ってる。それを助ける事が出来るのに放つて置くなんて俺には出来ない」

「まだ3回しか会つてないんだよ、俺たちつて。何でそう思えるの？」

「こついつのは時間や回数じゃないだろ？」

一志の表情が歪む。何だか泣きそうに見えるのは気のせいだろうか。

場が膠着し、互いにどう出ればいいのか判らずに立ち尽くす。

キシリと床が軋んだ。その音で場が動く。一志が後退りを始めたのだ。そのままドアを開け玄関へ向かう。後を追う形で俺も急いで玄関へと向かう。

靴を履き終わるまでは間がある。その隙に俺はチェーンキーをかけ、下がったチェーンを握り抑え込んだ。こうすれば簡単には外へ出られないだろう。

「離せよ！」

一志が手を外そうと躍起になる。腕を揺さぶり、握った拳ををこじ開けようとす。だが、そんなことをされて簡単に離す程、俺も非力ではない。

「何なんだよ、あんたは！」

悲鳴のようにも聞こえる抗議。追い詰められて恐怖にかられているかのようだ。その姿にイラついて怒鳴るように言い放つ。

「逃げるように帰ろうとするからだろうが！」

動きが止まる。一志は顔を上げると思い切り俺を睨み返してきた。だつて怪しいじゃんか！

「あ？」

「一緒に住むかとか」

自分の言動を振り返ってみる。まあ、あんな形で一緒に住むかなんて言われたら俺だつて逃げたくもなるか。確かに怪しい。考えてみれば警戒されても仕方がない。

「……そりゃ、そうだよな」

間抜けな返答で気が抜けたのか、一志が力なく玄関ドアに寄りかかる。

「本当に協力したいだけ……なんだ？」

「そうだけど？」

ずるずると背をドアに這わせながら一志が座り込んで力なく笑う。

「信じられねえ、優しいって言うより馬鹿じゃんか」

「それは失礼じゃないか」

見下ろすと一志の頭が丁度良い位置にある。軽く拳を落とすくらいは大目に見てもらおう。一志が落ちた拳に大袈裟に反応するが、それは敢えて無視する。

抗議が一段落しすると、一志が俺を見上げながら何か言いたそう

にしている。促してやると、ようやく口の中で転がしていた言葉を吐き出した。

「……一緒に住むかって言われても、まだ良く判らない」

小さな子供のようで、俺は思わず頭を撫でてやる。

「無理強いはしない。でも、マジに考えろよ」

「解かった」

俯いてから、一志が真面目な声で静かに呟いた。

その伏せた瞳がその時どんな色だったのかは俺には判らなかつた。

scene・3 (後書き)

……一志が思ったのと違う反応をしてくれました(^ | ^ ;)
でも、この行動の方が実に彼らしいです。強がって、粹がって、それでいて弱いって、何だかさり気無く協力してやりたくなります。

木戸っちは露骨に手助けしたがるから警戒されるんだなあ。そしてそんな所が普段の生活でも色々誤解される原因になっていそうです。そう考えるとちょっと損な人(^ | ^ ;)

結局あの後は再び上がり込むのも何処と無く居心地が悪いということで一志は帰って行った。……少しは信用して貰えたと思って良いんだろうか。ただ、心配なのはあれから連絡は全く無いということだ。あれだけ警戒された手前、俺からは連絡し辛い。自然消滅つてもあるか。本は宿のお礼と割り切られたら……

「やっぱ凹くむよなあ」

就業中に思わず独りごちたら、同僚にミスったかと突っ込まれた。どうやら気を抜くと一志のことを考えているらしいと、その際に気が付いた。やはり話された境遇のことが焼き付いてしまったのだろう。

自分は末っ子なので、かなり甘やかされて来た方だと思う。受験勉強だって真剣に取り組んだ記憶があまり無い。しかも大学は自宅から通っていた。両親とも年の開いた兄弟とも仲違いすることはなく、社会に出てもそこそこ苦労せずにやって来た。

そんな暮らしと一志の暮らしとは大きく隔たっている。実際、彼から聞いた話しは、まるでドラマか何かのように感じた。俺はいきなり舞台に引き擦り込まれた端役のような気分だった。しかし、実際は紛れも無い現実であって、一志の様子からも嫌なくらいにそれを感じた。

あの日から就業中にPCのキーボードを打つ手が時折止まる。そんな時は一志の言葉が浮かんでいた。

俺はあの家を出る

どんな気持ちで言ったんだろうか。親を恨んでいるんだろうか。

……俺は無神経なことをしてしまったんだろうか。

考えれば考える程に気持ちが悪後悔という深みに埋まり込む。過ぎて行く時間と共に焦燥と不安は増し、意識は否応無しに一志に捕らわれて行く。

そんな焦れた日々が2週間以上も過ぎた頃だった。一志から週末に本を返しに行くという連絡が入った。拒絶はされていない。それが判って殊の外嬉しい。自宅で携帯を切ってから、俺は安堵の溜め息を洩らした。

しかし、よくよく考えてみると、一志に対して色々と過剰反応していないか。気になって仕事に手が着かないって、かなりダメじゃねえか。女と初めて付き合った学生か、俺は！

不意にあの時の感触が蘇る。唇と舌、そして触れられた手……いや、いやいやいや、それは根本的に何かが違うだろうが！

俺は自分の思考に眩暈を覚えた。浮かんだ考えを振り払うように思い切り首を振る。今が就業後で本当に良かった。そうで無かったら聡い同僚に何を勘繰られることやら。

どうにも遣り切れない気分で溜息を吐き、俺は畳の上にゴロリと仰向けに寝転んだ。

複雑な気分で一志を迎えた週末。夕方過ぎ。暗くなってからノコノコと何の蟠りも無い顔で俺の自宅に現れた一志に少しムツとした。そんな俺の顔を訝しげに一志は覗き見る。

「木戸さん……？」

遠慮勝ちに苗字を呼ばれる。数回逢っただけなのに、何故かそれが余所余所しく感じられ、心に不満を覚えた。

「……靖弘でいい」

小声でポツリと本心が溢れる。自分のテリトリーに入ること、いつの間にかコイツには許しなくなっている。その気持ちは何だかとても不本意な気がした。連絡が無くて焦れていた時間が長かったせいもある。苛々してどうしようもない。

「でも、初めて逢った時には……」

毛羽立った気配を空気で察したのか、一志がしおらしく俺を見る。それがまた苛立ちを焚きつける。

「お前ならいいんだ！」

イラつく気持ちのまま一志にぶつけてしまい、顔を背けながら悪かったと呟く。やっぱりコイツが絡むと調子が狂う。玄関先で迎えた早々喧嘩のような展開だ。先が思いやられる。頭を抱えなくなった時だった。

ふうつと息が漏れる音が聞こえ、一志を見ると、なんとも表現しがたい顔で俺を見ているのが目に入った。笑いたいのに笑えない。そんな感じで固まっている。そんな表情に目を離せないでいると、一志の瞳から雫が溢れた。

俺は大いに慌てた。訪問直後に駄々子のような態度で接した自分に、心の中で罵倒を浴びせる。でも、コイツがそんなもんで泣くか？ そうは思っても目の前の一志は立ったまま瞳を潤ませている。

困った。涙を拭いてやるにも手元にハンカチが無い。やや考えてから、俺は手の平で一志の頬を包み込み、親指の腹で涙を拭き取った。

一志が瞬きし、自分の手を頬に当てる。そうして驚いたように目を見開く。

「俺、何で泣いてんですか」
自分が泣いていたことに気付いていない？ でも、俺が言った事で泣いてるのは確かだよな。ただ、どの言葉や行動が原因なのかはさっぱり見当も付かない。

それがまた苛立ちを生み、俺は吐き捨てるように言うしかなかった。

「………知るかよ」
自分のシャツの袖口で一志は目頭を擦るが、涙は一向に止まらず流れ落ちる。

「つとに、おかしいなあ………」
笑おうとしても上手く笑えず、かえって涙が酷くなってしまいうだ。堰を切ったように伝う雫は一志を混乱させていた。自分の意思ではどうにもならないらしい。何でだ、おかしいと言いながら、

終いには嗚咽が混じり始める。

そのまま立ちっぱなしという訳にも行くまい。

「とにかく上げれ」

俺は、まだ自分に困惑している一志を引っ張るようにして家へ上げた。泣いた女と子供の相手は出来ればしたくない。でも、今はそんな事を言ってる場合じゃない。

まずは和室に座らせる。それからフェイス・タオルを持ち隣室へと入った。冷気が顔を撫で、意識が少しクリアになる。

本当に何なんだ、あの涙は？ 傷を付けるような事は言っていない。怒ったような言い方で泣いたとも思えない。それに本人も泣いているなんて思っていなかった。会話の内容は俺が名前で呼ぶことを認めただけだが…… まさか、それが原因で訳では無いよな？ 嫌だったとか、そんな事だけで泣くか？ それとも反対に嬉しくて泣いた……とか？

その場で考え込み、何時だったか、飲み会の席でばやいた同僚を思い出す。

「両親がそろって子供が我儘を言えるからそんな事が言えるんだ」

普段あまり話さないそいつが、ひよんなことから始まった家庭の愚痴大会に対してそんな発言をし、宴席に気まずい沈黙が広がった。

「本気で親が信用出来ないって辛いんだぞ」

かなり酒に吞まれていたらしく、その後ぶつぶつと言いながら同僚は机に沈み、場が開くまでそのまま眠り込んでいた。

後日、彼は施設育ちらしいとの話が何処から漏れ聞こえて来た。

本人を避けながら憶測は広がり、暫くの間、仕事上係わりが多い俺は、かなり気疲れしたのである。

アイツは大人を信用出来ていなかったのかもしれない。微かに漏れた家庭の様子を思えば、ただ一人の親でさえ信用出来ないのだから。

もしかしたら、信用出来るらしい初めての大人？ っで一志に思われたって考えても良いんだろうか。もしそうなら、これはかなり責任重大なことにならないか。

そこまで一志を背負い込むことが出来るのかと自問する。

この前会った時は危うく信用を失う所だった。信用を無くしたら、彼は二度と自分と会いはしないだろう。それがはっきりと判った。

あの時の追い詰められたような一志の様子に、俺はシヨックを受けていた。時間が経つほどジリジリと俺を苛み、もうあのような顔をさせるまいと、思い返す度に強く思った。

俺は一志に信用されたいらしい。だったら覚悟を決めるべきだろう。

「家に来いとか言ってるしなあ」

頭を掻きながら和室に戻ると、一志はまだ泣いている。俺は静かにローテーブルの上にフェイス・タオルを乗せた。涙を流すことに気を取られ、一志はそれに全く気付かないようだ。

そんな一志を俺はただ見つめた。声を掛けるでもなく、慰めるでもなく、一志が自然と泣きやむまで黙って見つめていた。

治まるまでに、どれくらいの時間が過ぎたんだろうか。ようやく一志はタオルに手を伸ばし、それを目頭に押し付けた。

「……頭が痛い」

泣き止んで開口一番に出たのがそれだった。それでかなりの時間泣き続けていたのが判る。時計を見ると一時間以上過ぎていた。タオルを外した一志の目の周りは赤く腫れぼったく、これでは目を開けるのも辛いのではないだろうかと思うくらいだ。事実、目をしょぼしょぼさせてながら顔をしかめている。

泣き腫らした目はかなり人目を引く。これだけ腫れていたら、帰途についている間も赤いままだろう。俺は溜息混じりに一志に言っ

た。

「そのままじゃ帰れないだろうが」

多分、一志は周囲が自分をジロジロと見ても気にはしないだろう。だが、俺はこのような状態の一志を見世物のようにしたくはない。

「お前、今日は泊まっていけ」

「でも……」

「迷惑じゃないから」

続きそうな言葉をかき消すように、俺はきっぱりと言い切る。両肩に手を置き、一志の顔を真正面に見据えると、まだ瞳が水を帯びて揺らいでいた。

頼り無い風情に何かが揺らぐ……

そこでいきなり我に返り俺は慌てて視線を逸らした。

何だかこの位置と雰囲気は色々とヤバくないか？ 違う違う、そういうのじゃない…… って、そういうのって何だ！ 何しようとしてたんだ、一体。コイツは男だし、ガタイだって俺よりイイだろうが！ ワケ判んねえ！

一志も良く解からないが、今は自分の動向が良く解からない。混乱したままでは逸らせた顔が戻せない。自分の衝動が何なのか考えるのは後にしなければ。今考えると何かとマズイ気がする。

一志の肩に置いていた両手を、なるべく不自然にならないよう注意しながら引き剥がす。そして、やはり動揺を隠すように声を出す。「め、飯。夕飯。何にする？ 何か食いたいものあるか」

間抜けな程に声が上がった。しくじったのが我ながら嘆かわしい。散々醜態を曝しておきながら格好悪いと懲りずに恥じる。そんな風にウジウジと考えていると、一志が何かを言った。

「……こ」

「あ？」

ようやく逸らせていた顔を一志へと戻せた。

「冷蔵庫、何か入ってる？」

冷蔵庫？ 何で？ 夕飯の話しじゃないのか……

「泊めて貰うんだったら何か作る」

「あ、そういうことか」

ポンと手を打つ。それを見て一志がようやく笑った。釣られて俺もようやく平らかな気持ちになる。

ところで、冷蔵庫の中って何かあったか。思いを廻らせても酒の肴と発泡酒程度しか浮かばない。あとは弁当に付ける副食くらいか。考え込んでいると一志が立ち上がる。

「勝手に覗いてくるよ」

サツサと部屋を出る一志の後を俺は慌てて追った。先日の事もあったので、半分は見張りつて感じた。信じてやればいいのに、まだ心の奥底では、逃げられるんじゃないかと不安らしい。冷蔵庫の前で扉を開けてしゃがみ込む一志を見てからやっと胸を撫で下ろす。

「何で缶詰が冷蔵庫に入ってるんだ」

ブツブツと文句を言いながら焼き鳥（塩だれ）の缶詰を取り出す。それから冷凍庫を開け、残量の少ない枝豆の袋を取り出し、缶詰と一緒にシンクの上に置く。

「他に何かある？」

元カノが何か残してるかもしれないと思い、俺は自分では殆ど開けた事がないガス・レンジの下の収納を開いてみる。一志も一緒に覗き込む。

未開封の乾燥パスタ、レトルトのマッシュルームにトマトの水煮缶。一志はそれを全て取り出し、やはりシンクの上に置いた。

「パスタくらいは出来そうだね」

手際良く材料を処理して行く姿は、何処となく満足げだ。俺は足手まといになりそうだったので、こそこそ和室へ戻ろうとしたが、そこを見つかり食器を用意するよう言い付かってしまった。

「俺の家じゃないんだから、食器の場所が判らないんだよね」

食器棚はキッチンに上手く配置できなかったため和室である居間にある。始めはキッチンで食事をしようとも考えて配置を考えたりしたのだが、狭すぎてテーブルなんか尚更置けやしなかった。食器

を取りに部屋を行き来しなければいけない、出来た料理を運ぶ距離が長い。それが我が家の欠点だったりするのだ。

食器を用意し、ついでに机周りも片付ける。大きめの皿は、あまり使っていないかった食器なので、一度洗うかとキッチンへと運んだ。美味そうな香りが漂い始めている。なけなしの食材で良くやるものだと感心しながら、空いたシンクで皿を洗い水切りに立てた。ついでにフライパンを覗き込むと、トマトソースが出来ていた。

「もうちょっとしたら出来るんで、部屋で待つてください」
言われると却って移動し辛い。躊躇してしまい言い分けを探していると、すぐにビシリと指摘された。

「邪魔ですから」

……だよな。撤退するしかあるまい。

仕方が無いので寢床の心配でもするしかない。と言っても、布団はひと組だけだ。

男の場合は大抵飲み明かして、気付いた時には和室で雑魚寝だし、女の場合は言わずもがなだ。が、一志の場合はどうなんだ？ 未成年だし、酒で温まるとはいかないだろう。

寒い季節だし、これから受験も控えている。蒲団に寝かせてやるべきだろう。まあ、初めに一つの布団で（ただ単に）寝た仲ではあるのだから悩むことでもないのだが、何と云うか、もやもやと……何処となく釈然としない気分というか、据わりが悪いといった気分だ。落ち着かない。そうだ、落ち着かないんだ。つつつか、落ち着かねえって何だよ！

別に一緒に布団で寝たって問題ないじゃないか。俺のせいで風邪を引かれるよりはよっぽどマシだ。腹を括って……って、何に腹を括るんだ！ 本気でワケ判らん！

自分を持って余す。参った。持て余し過ぎて、もうどうでも良くなってくる。

「開けてくださいーい！」

戸口で呼ばれて、そのタイミングの良さに感謝しながら、両手に

皿を持つ一志を迎え入れた。

「自信作！」

テーブルに置かれたパスタは、トマトソースの赤に枝豆のグリーンが鮮やかで、見た目も美味そうだ。座りながら一志がスプーンとフォークを手渡ししてくる。

「冷めないうちにどうぞ」

客に接待をさせる俺ってどうなんだか。腑甲斐ない思いに駆られるが、それも今更だ。有り難く受けさせてもらおう。

「いただきます」

促されて一口分をフォークに巻き取り口に入れ咀嚼する。あ、美味い。酸味と塩気が丁度いい感じだ。

目の前の人が好意を持って自分に食事を作ってくれる。嬉しいし感謝しているし、俺も好意は持っている。女性なら手放して喜んで良い状況なのに、性別が異なるだけで、何でこんなに複雑な気持ちになるんだ。どうリアクションを返していいか判断が出来ない。

「美味しくない？」

意思確認で我に還る。フォークを啜えて一瞬フリーズしていた。

「あ、ああ、美味しいよ」

嬉しそうな笑顔に何故か胸が騒ぐ。後ろめたい心地でいるのを悟られないように、他愛の無い会話に頷きながら食事をするのは、かなりの重労働だった。

scene・4 (後書き)

予定よりも長くなり、急遽この部分のシーンは二つに分けました（
^ | ^ ; ;）

本来はもっと後まであるシーンなのですが……

靖弘の家庭環境も軽く出したので、二人の境遇の違いがうっすらと
見えて来たのではないでしょうか。

まだまだ続きます。飽きられていないと良いのですが（^ | ^ ; ;）

食事の後は、ダラダラとテレビを見たり、本を読んだりしながら時間が過ぎた。合い間合い間に気楽な会話を挿みながら、互いに寛いでいるといったように。

そう、外見は実に穏やかに過ごしているように見える。見えるのだが…… 実際には表に出ていないだけであって、俺は非常に落ち着かない気分だ。

一志はと言えば、順応が早いのか、見た目は思いつきり平然としている。今、読書に没頭している時点で、既にこの空間に馴染んでいると判断しても間違いではないだろう。

問題は自分だ。人が家において、これほど落ち着かない気分陥ったことは今までに無い。一志とは、年齢も離れているし、境遇も驚く程に違うのだ。しかも、いきなり思いもよらない事をする。だが、出来得るならば、近くに居て貰いたいと思う。あの家に帰すことが心配なのだ。しかし、接し方を考えあぐねている。

……って、反抗期の子供の親か、俺は。
出かかる溜息を飲み込む。気付かれてはいないと思うが、念の為に一志の様子を確認してみる。本を読む姿に変化は無いので、どうやら大丈夫のようだ。

こんな具合でいるのも流石に疲れてきたので、気分転換に風呂にでも入ろう。そう思い立ち、俺は部屋からこっそりと逃げ出すようにして風呂場へと向かった。

浴室の蛇口を捻り、少し熱めの湯を流し込むと、室内が白く煙る。湯気を吸い込むようにして深呼吸をすると、自分の身体がかなり強張っていたことに気付いた。

「何やってんだか……」

変に意識し過ぎてるってのにも程があるだろう。バスタブの縁に手をかけ頂垂れると、長く深く溜息を落とす。色々考えることが

有り過ぎて一杯一杯だ。とぼとぼと音を発てながら溜まっていく湯を、つい呆けたように見つめてしまう。落ちて行く湯と溜まる際の気の抜けるような音を感じているうちに、身体がゆっくりと弛緩し、気分も僅かではあるが穏やかになって行く。

「そっぴゃ、一志の着替えも用意してやらないといけないな。スウエットなら多少体格が違っても問題ないだろう。湯がバスタブに溜まりきるまでは、まだ若干の時間がかかる。その間に衣類の用意をしておくことにしよう。」

風呂場を後にすると、湯気で湿気った為か、寒さに身震いがした。暖かい所へ移動したい欲求が生まれる。逃げ出した和室の温もりが恋しいと思つた都合のいい自分に呆れつつも、着替えを引っ張り出した俺は、それらを抱えて一志のいる部屋の戸を開けた。

「うわあ！ 驚いた！ 背後からいきなりって怖いって」
うっかり忘れていた。コイツ本に熱中してたんだっけ。

そんな所に死角である部屋側から戸を開けたので、かなり驚かせてしまったらしい。

「悪い、悪い。脅かすつもりは全くなかったから」

読書を中断させてしまったのは悪かったが、中断したついでだ。持つて来た衣類とバスタオルを一志の目の前に黙って突き出す。一志は突き付けられた一山を手に取り、しげしげと見つめてから疑問を口にした。

「なに、これ？」

「着替えだ。寝まき代わりに。今風呂も溜めてるし」

嬉しそつに一志が笑う。コイツは素直だとヤケに可愛い。ついニヤけそうになり手で口元を隠し横を向く。そして体裁を保つ為にやや時間を開けてから次の言葉を投げ渡した。

「あ、でも風呂は俺が先に入るからな」

「普通は客に譲るものじゃなかったっけか」

笑いながら答える声には屈託がない。その声を聞いて不意に熱い物がこみ上げる。

「家主の特権だ。従っとけ」

一志に背を向け言い放ったが、声が震えていたかもしれない。自分の着替えとバスタオルを取りに行き、そのまま風呂場へ向かうという用事をこじつけ、俺は再び避難を決行した。

後ろ手で戸を閉めると、一気に目頭が熱くなる。感情の振幅が激し過ぎてどうにもならない。絞り出すように息を吐き、どうにか気持ちいを治めると、俺は衣類を持ち脱衣所へと向かった。

荒々しく脱衣しながら、今度は自分がイラついているのに気付く。振り回されっぱなしの自分に腹が立つ。こう気分が波立つのは一志のせいだが、それを認めるのも癪だ。これだけコントロールが効かないと、また八つ当たりしてしまいそうで怖ろしい。

「それはもう出来ないなあ……」

浴室に入り身体を洗いながらも、うだうだと後ろ向きに考えてしまふ。自分でも解かつてはいるが、あまり良いことではない。下がり始めると段々と後退する歩幅が広がるのだ。こんな所が自分でも嫌で仕方がないのだが、中々変えることは難しい。

バスタブに浸かり、その端に頭を乗せ、温かい湯に身を委ねる。温まると少しは前向きになる気がするから不思議だ。

普通に泊めて、普通にしていればいいじゃないか。……いや、まあ、その普通がどうかは今判らないんだよな。

ずるずると湯船に頭の先まで沈み込み、後退しようとする思考を振り払う。静かに吐きだす空気がポコポコ音を発して水面に上がるのを聞きながら、一先ず考えることを止めにした。

ずっと逃避し続けるという訳にもいかないのです、のぼせる前に風呂から上がり、楽な部屋着に着替えて和室に戻ると一志を風呂へ入るよう促した。

「寝床を用意してる間に風呂に入っとけ」

一志が適当に相槌を打つ。本の続きが気になっているのだろう。

乗り気でないような生返事に俺は取敢えず聞いてみた。

「寝床はロフトに一緒でいいよな？」

「え？」

あからさまに驚いて一志が本から顔を上げる。その反応が変に気にかかる。

「蒲団動かすのも面倒だしな」

「……そう言う事か」

何を考えたんだ、コイツは。……いや、コイツがどう考えたかっ
てのは勘繰らない方がいい。今そんなことをしたら、自分が何か色
々とマズイことを考えそうだ。

自然と視線が一志を避けて部屋の中を彷徨った。

「あー、お湯が冷める前にとっと風呂入れよ」

そう言つて一志を風呂場へと追い立てようとしてみる。一連の行
動を一志は物凄く不審そうな眼で見ているだろうと思うのは、いさ
さか悪く考え過ぎているかもしれない。……胃が、痛くなりそうだ。
一志の動く気配がしたので、それに合わせて口頭で風呂場の場所
を教えてやる。

先程渡した着替え類を抱えて一志が部屋から消えると俺は行動を
起こした。

「さてと……」

押入を開け仕舞い込んでいた夏掛けとタオルケットを出す。それ
から予備の毛布。他にシーツと余っている蒲団カバーを一つずつ口
フトへ投げ入れてから、俺は単身でそこへ上がり寝床を整えた。そ
れから先程考えついたように、敷布を一枚ずつにしシーツをかけ、
一志の方にはきちんとした毛布に上掛けを、俺の方は毛布、夏掛け、
タオルケット、布団カバーの順で重ねて行く。これならかうじて
二組分の蒲団だ。しかし見るからに自分の陣地に厚みが無い。寒い
だろうかとやや心配になる。

「寒けりや…… 不本意だけど隣に潜り込むしかないな」

風邪を引くよりはマシだなと、勤めてそれだけを考える。それ以

上は考えない。

最後に全体を見回し、そこで傍と気付く。枕が無い。少し考えてみて膝かけとタオルで代用にすることにした。寝転がって頭に当てがってみたが悪くは無い。

「こんなもんか」

準備が出来て梯子を降り、ペットボトルのお茶を開けていると、湯上りの一志が戻って来た。そしてフワフワとした口調で開口一番こう言った。

「風呂に入ったら何だか眠い」

あれだけ泣いて、多分、一志なりに気を使って、湯に浸かれば眠くもなるだろう。一志はロフトに上がる梯子に手を添え、欠伸をしながら立っている。

半端に水を拭き取っただけらしい髪の毛の先から、肩に掛けたタオルに雫が滴った。あれでは蒲団が濡れる。

「髪拭け、髪！ 乾くまで上がるなよ！」

面倒くさいと言った感じで一志が頭をタオルで覆うと、ガシガシと雑にタオルを使って髪を拭きながら腰を下ろした。眠くて適当なのか、あまり巧く拭きとれていないように見える。仕方がないなど、俺は一志の背後に陣取り、忙しく動かしている一志の腕を止めタオルを奪った。

「雑に動かしてるだけじゃ拭き取れないだろうが」

一度タオルで頭を撫でるようにしてから、水を含んで重たそうになっっている毛先を拭い、それから生え際から髪の毛の流れに沿って細かくタオルを動かして行く。

真黒でしっかりした髪質。柔らかで細い自分の髪質があまり好きではないので羨ましいと強く思ってしまう。つい髪を拭きつつ毛先を摘まんでしまった。素手で触ると尚更自分と異なる髪質に魅かれてしまう。乾き具合を確認するという形で俺は手櫛を入れてみた。

何か触り心地いいし。硬めのストレートだよな。色も抜いてないから綺麗な黒だし。マジで妬ましいくらいに羨ましいぞ。

手櫛で梳くとまだ若干だが水が滴る。かなり拭き取ってはいるのだが、乾いていると思っても根元の方がまだ拭き切れてはいないようだ。

「水切れ悪いだろう、俺の髪って」

もたもた髪を弄っていたのを気にしてか、一志が眠たそうな声で問うてきた。

「水含みが良いんだから、健康な髪ってことなんじゃないか。俺は羨ましいぞ」

襟足辺りの髪を拭きながら俺は正直な感想を伝えた。自分の髪だったら水分が抜け過ぎてバサバサになっている。

「えー、伸びるの早いし、寝癖なんか濡らさないと取れないんで大変だよ」

ブツブツと言いながらも一志は何処か嬉しげだった。

それからもう暫く一志の髪と葛藤し、ある程度の所で手を止めた。見事なまでに水分が拭いきれていない。

「……羨ましいって撤回するわ。いつもじゃ大変だなあ、これじゃあ」

「だろ？」

根負けした俺に一志の笑い声が聞こえた。

「もうこれでイイから登って寝てな。眠いんだろ？」

「靖弘さん寝ないの？」

敢えて時間差で寝ようと思っっているのに余計な気を使いやがってそんな考えを悟られないよう俺は座り込み、テレビを見ているフリをした。

「見たい番組もあるし、会社の書類も読んどきたいからなあ」

嘘だ。どついう態度でいればいいのか判断がつかないから逃げている。

真っ直ぐに届く一志の視線が途轍もなく痛い。沈黙が漂う。空気が重すぎる。自分で招いた事なのに、場に負けそうだ。

そんな中、一志が俯きながら小さくぼやいた。

「せつかく泊まるのに、先に一人で寝るなんて、何だか…… 淋しいじゃん」

負けた。しおらしい態度で呟かれると抵抗出来ない。折れるしか出来ない。精々仕方がないからという態度に見えるように、大袈裟に溜息を吐いてやった。

「解かった。解かったから大人しくロフトに上がってる」

俺が追っ払うように手を振ると、一志は弾けるように行動し梯子に手を掛けた。

言う事を聞いて梯子を登って行こうとする一志の顔が一瞬見える。その表情は見違えるように明るくなり楽しそうだ。

嬉しいんだな。そう感じて心がざわつく。湧いてくる想いに戸惑う。何なのだろうか、この気分は。温かいような、疼くような、戸惑うような……

上がっていく一志の後ろ姿を目で追いかけながら、想いの元を手繰っててみたが、それはそんなに簡単に見つかるものではないらしい。首を振り、途中で手繰るのを止め、自分も一志の後についてロフトへと上がり込んだ。

見ると一志が厚みの薄い蒲団に潜り込もうとしている。慌ててその行動を引き止めるように俺は声を掛けた。

「そっちが俺の。お前のは反対側。一応お客なんでな、良い方にしといてやった」

一志が振り向き無言のまま俺を見る。

「な、なんだよ。文句でもあるか」

くすぐったそうに笑って一志が首を振る。それから場所を移動して所定の位置に収まった。俺はそれを見届けてから蒲団に入った。

「いつも一緒に寝るのは女の人ばかりだったから、年上の男の人ってちょっと新鮮かもね」

聞こえて来た一志の言葉に若干腰が引ける。本気で笑えない自分がいて、身構えているのが判った。

「……寝るって一緒に横になるだけだよな」

警戒を込めて口にすると、一志は笑いながら、焦らすような感じで応えた。

「大人な意味でもいいけど？」

本当に喰えない子供だ^{ガキ}。

「馬鹿な事を言つてないで寝ろ！」

頭を無理矢理に布団の中へ押し込む。若干抵抗されたが、一志は割と素直に頭を引っ込めた。それから、くぐもってはいるが、樂しげなくすすすと笑う声が聞こえて来た。

「俺、大人の男の人と一緒にこうして過ごすのって初めてだ」

「そうか」

父親とは一度も面識が無いんだろうな。そう思ったら、無意識に隣の蒲団の膨らみをポンポンとあやすように叩いていた。ひと時ゆったりと時間が流れる。

一志が身動きし、俺は手を止めた。蒲団から顔を出し、一志が俺を見る。

「父親と一緒に、こんな感じがするのかなあ……」

一志が微かに呟いた。何とも言えない感情が湧きあがる。

「こんなデカイ子供がいて堪るか」

苦笑交じりに応じると、一志はそうだよねと言い目を閉じた。間もなく小さな寝息が聞こえ始めた。

「本当に困った子供だ」

その顔を覗き込み、小声で吐き出す。

安心しきつた無防備な姿が幼い。その顔を見ているうちに、完全に振り回されている自分が何だか馬鹿みたいに思えてきた。そうだ。少し大き過ぎてはいるが、こいつはまだ子供なんだ。子供に振り回されるのは大人の義務の一部だろう。何処となく自分を納得させている気もするが、そう考えたら、この訳の解からない感じも妙に納得出来る気した。

寝転がり目を閉じると、隣から一志の寝息が聞こえる。規則正しい強弱と、上下に揺れていた気持ちのせいで、俺はあっけなく眠り

に引き込まれて行った。

scene . 5 (後書き)

注意：木戸つち（靖弘）が風呂場でずるずる湯船に沈んでますが、あれをマジでやると溺れかけることがあるので真似しないでください（作者体験済）。

それはさて置き、主役の往生際が悪くてそろそろ書いてて焦れてきました！ act . 1 はあと1回で終了予定です。お付き合頂ければ幸いです。

この話数を書いている最中に、崎谷健次郎「きみのために僕がいる」を聴いて、思わず木戸つちの心境？とか思ってしまった。……でも、これってプロポーズの曲なんですけど（＾―＾；）

ちなみに歌詞はこんなの。

<http://www.utamap.com/showkasi.php?surl=B37628>

act . 1 のラストあたりでは多分こんな心境な筈です。いや、ちよつと違うかなあ（＾―＾；）

s c e n e . 6 (前 書 き)

一応15R指定の話になります。ご了承ください。

朝起きると既に一志はいなかった。慌ててロフトを降り、テープルを見ると、その上に一枚の置き手紙らしきものがあつた。

早朝バイトが入ってるんで帰ります

素っ気ない一文に虚しさを感じて俺はがっくり頂垂れた。起こすのも悪いと思つたんだろうが、その気の使い方は間違つてるんじゃないだろうか。これじゃあ却つて焦つて心配する。

「あ、そついや鍵掛つてんのか？」

一志が帰つたということは施錠されていないかもしれない。そこから辺を気遣つて欲しいと思ひながら玄関へ確認へ向かう。

「……」

きちんと施錠されていたのを見て俺は言葉を失つた。郵便受けを覗くと底の方に鍵が落ちている。冷静でしつかりし過ぎだ。

普通、ここまで気が回る高校生がいるか。もし同居したら俺が面倒見て貰う事になるんじゃないだろうか。

それは避けたいが自信は全く無い。家を出る為に受験勉強をしなからバイトをしてるくらいだ。絶対俺よりしつかりしてるって。

そこまで考え、俺はようやく、昨日一志がバイトで遅くなったのかもしれない。それなのに俺は大人気ない事をしてしまった。

何だか色々な部分で負けてる気がする。勝つてるのは本当に年齢だけかもしれない。

「ああ、もう、情けねえ！」

恥ずかしくて堪らない。

昨日だつて今日だつて一志にバイトがある可能性を考えていなかった。そんな事で一志を支えてやりたいって、何だかおこがましくないか。でも……やはり放つてはおけないと思う。

エゴだという言葉が浮かぶ。あの環境から一志を連れ出したら、俺はそれで満足するのだろうか。それだけが望みなのだろうか。

少し前から心の底で燻ぶっている何か。それは風が吹き込んだら、一気に燃え盛ってしまうのかも知れない。その気持ちは何なのか、うつすらとではあるが判っている。ただ、認めたく無い気持ちが、今はまだ勝っていた。

一志に同居を提案した時にされた拒絶。自分をどうしたいのかと聞いて来た。あの時の俺は無意識に物欲しそうな様子を見せていたのだろうか。いや、そんな事は無かった筈だ。だが、もし、一志が一瞬でもそう思っていたのだとしたら…… 同じような拒絶を受けるのが怖い。知らずに手を強く握り締めていた。気付いて力を弛めると、指先が震える。

「……ははっ」

そんなに怖いのかと思うと、何だか笑えた。玄関の戸に寄り掛り見るともなく室内を見渡しゆっくり息を吐き出した。

一志の都合に合わせて、今度はゆっくりと話しを聞こう。進路や夢といった先に広がるであろう明るい話だけを。そうすれば余計な事は考えないで済むかもしれない。

しかし、そう思っていたのとは全く異なった状況で俺は一志と会う事になった。それもまだ週の変わらない内にだった。

玄関の呼び鈴が鳴った。平日だよな、夜中だよな。これから寝ようかと思っていた所に誰なんだと思いつつ、俺は雨音が聞こえる中、玄関へと向かった。覗き穴から様子を窺うと見覚えのある姿がある。

「一志?!」

チエーンキーを外し、慌てて玄関を開ける。目の前には雨に濡れた一志が佇んでいた。寒そうに両腕で自分を抱き込むようにしている。学生服姿のまま、雨の中、コートも羽織っていないかったようだ。

「お前、どっ……」

一志の縋るような瞳が俺を射抜く。何があつたか聞いてはいけないと何故か瞬時に思い、俺は言いかけた言葉を慌てて飲み込んだ。雨に濡れそぼった一志は、頼り無い風情で、今にも折れてしまいそうに見える。俺は動揺していた。不用意に触れない何かが一志に纏わりついている。

「中入れ。風邪を引く」

出来るだけ穏やかに言葉を紡ぐ。この感じはヤバい。下手な言葉は一志を壊しかねない予感がする。空気が張り詰めて痛いくらいだ。動く様子を見せない一志の靴を脱がせ、無理やり玄関から動かす。そのまま一志を仕事部屋へ引つ張り込み、棚からタオルを漁った。

「……靖弘さん」

擦れた声で名前を呼ばれた。すぐ後ろに一志の気配。振り向くのを躊躇っているうちに、一志の両腕が後ろからやんわりと俺を抱き込んだ。大人を恋しがる子供の姿が過ぎる。それを承知で一志の重みを背中で受け止めた。髪が肩に触れ、俺の着衣を濡らす。

一志が何を求めているのか。それは絡んだ腕が伝えてくる。多分、こつした甘え方しか知らないのだろう。抗っていた自分の気持ち解放、自然と受け止めてやりたいと思えた。

「一志」

声が震えた。互いに何をするのか判っている。

一線を越える際に感じる止められない流れ。流れ始めれば止められない川に似ている。互いの触れ合いだけを求める。初めは探るように。それから窺うように。

一志の唇が頤を撫で耳朶に触れる。ゾクリと背中に刺激が走る。肩を掴まれ、やや強引に身体の向きを対峙させられると、一志は噛み付くように口付けてきた。

触感と音だけを拾うために俺は瞳を閉ざす。そのことに集中しなければ、余計な事に触れてしまいそうだった。

一志の口付けは初めての時よりも荒々しかった。唇を軽く噛まれ、舌を吸われ甘噛みされると酔ったように力が抜けた。

「ん、くっ……」

解放された一瞬に漏れる自分の声。甘く鼻に絡んだような響きの主が自分だとは信じられない。俺は今、一志の思うままに口腔内を犯され、絡み合った舌の濡れた音は俺の頭の芯までをも犯していく。「……っあ」

舌先で口蓋を探られ、駆け抜ける甘い痺れに身体が小さく仰け反った。それを合図にしたかのように、一志が深く口付けたまま俺を床へと押し倒す。

互いに口付けしながら着衣のボタンを外しにかかる。学ランから滴る雨水が涙のように時折落ちた。その度に俺の心に波紋が広がる。もっと近くで抱きしめてやりたい。

頭わになってゆく冷え切った肌に手が触れる。胸に手を当てる。感じるのは熱に浮かされるように早さを増した鼓動。

一志の形の良い手指が滑るように脇腹を撫で上げてくる。

俺は肌の触れ合いを求め、一志の濡れたシャツを脱がそうと裾を引いた。湿ったシャツは肌に張り付き、思うようにはならない。焦れたのか、一志が荒々しくシャツを脱いだ。それを下から見上げ思わず息を飲む。

薄っすらと汗の浮かぶ肌を見て鼓動が跳ね上がり、俺は気恥かしさで顔を背けた。多分物欲しげに見ていたに違いない。あの躍動する肌に触れたなら、手が吸いついたように離れないだろう。それは堪らなく心地良い感触なんだろう。

俺はそれを欲している。その事実に対抗う気持ちはもう起きなかった。

シャツを脱ぎ捨て一志が身を沈めてくる。腹部に縋りつくようにして腰骨辺りに舌を這わせ、手は対局の部分と腹部を愛撫する。刺激で零れ落ちそうになる喘ぎを押さえながら、俺は自ら脱ぎかけの着衣を剥ぐと、そのまま上体をやや起こした姿勢で一志の頭に手を触れる。一志は顔を上げ、熱い眼差しで俺を見つめた。

視線を絡め合い互いに顔を近づける。背に腕を回す。口付ける。

床に身体が堕ちる。背に感じるフローリングの冷たい感触。それと対峙するように前面へ^の押し掛かる熱い肌の感触。立ち昇る熱気は欲望そのままに熱い。冷えていた一志の身体も、今では熱を発しているかのようだ。

下肢の着衣も邪魔だった。自らウエストに手を掛け、取り払うようにして脱ぎ散らす。一志の方にも手を伸ばすと、彼の動きが一瞬止まる。

「いいの？」

ここに来て躊躇したのだろうか。耳元に囁く声。声で答える代わりに手を忍ばせて一志自身を握り込んだ。一志が声を殺し息を詰めた。指を絡ませ滑らせると、耳元にかかる息が切れ切れと乱れる。

自分から煽ってどうするんだとは思うが、何かを忘れたいなら色に溺れるのが一番早い。さっさと理性を飛ばしてしまえば深く眠れるだろう。

先を促すように耳元へ囁くと、一志は素直に身を沈め行為に没頭した。

事を為して気を失うように眠りに落ちた一志の腕から、逃れるようにして俺は身を起こした。安心しきって穏やかに眠っている顔を見て、俺は胸が塞がるような感じがした。と、手の甲に水滴が落ち伝った。それが何なのか瞬時に判断が付かず、ぼんやりと濡れた肌を見つめる。再度水滴が落ちると、鈍く働いていた頭がようやく涙だと認識した。

涙……？ 何でだ。一志の境遇に同情していたのか。だからこんな行為を許したのか。違う。じゃあ、どうして。

考えている間にも涙が伝う。拭いもせずに放置して、俺は横で眠る一志を見つめた。その髪にそっと触れると、堪らなく切ない想いが湧いた。

ようやく正直に自分の気持ちに向き合う。締め付けられるような

この想いは一志のせいだ。一志への想いが胸を縛る。

俺は一志を欲している。心の奥底から。だけど、コイツの本心は？

先日の一志の泣き顔が浮かぶ。本人は自分の泣いた理由が解からないようだったが、俺はこう思っていた。

自分を大切にしてくれそうな相手を得た安心感で気が緩んだんじゃないのか？

大人でいなければいけなかった一志。全てにおいて張り詰めた生活が辛く無かった訳がない。俺は一志にとっては初めて出会った同性の保護者のようなものだ。懐いてはいるが、それは決して愛情ではないという気がする。

今日会いに来たのだって、慰めと保護を求めてだろう。それは嬉しい事だが、相反する気持ちの方が強い。たまたま近くにいた絶れる相手が俺だったからだ。そう、一志にとっては誰でも良かったんだ。

「……畜生！」

苦い思いが胸を圧する。貪欲に一志を欲する自分がいた。肌を合わせたせいで、弥いやが上にも想いは増し、今は一志を求めてやまない互いを恋うのは同じだが、俺と一志では意味が大きく違っている。俺はコイツでないと嫌なのだ。その現実が俺には辛い。

結局捕まったのは俺なのか？

見かけと異なる脆さを持つ一志に魅かれた。自分を慕ってくる姿に好意を持った。支えたい、慰めたい、力になりたい……そして触れてみたいと思った。だが、触れてみた結果がこれだ。

雨の音が耳に付き、遣る瀬無さが募る。寒い。それで服を着ていない事を思い出す。

このまま寝かせてしまう訳にはいかないなど、義務感で一志を揺り起こす。一志が身動きしてから、俺は慌てて自分が泣いていた痕を消そうと掌で顔を拭いた。気付かれたら一志が不安になる。そんな気持ちにさせるのが嫌だった。

億劫そうに一志が起き上がる。そして寒さに身を震わせた。引き出しにあつた衣類を適当に選んで一志に放つてやると、半分寝ながら袖を通した。俺も寝巻を身に付ける。

よろけながら立ち上がった一志を支え、ロフトの梯子を登らせてから蒲団に押し込むと、自分も一緒に潜り込んだ。すると待っていたかのように一志がすり寄って来た。その温かさが心地よく切ない。俺は胸の痛みを誤魔化すために、自分の胸元に寄つた一志の頭を撫でた。熱い吐息を胸に感じ、抱きしめたい衝動に駆られる。撫でていた手を止め、一志の背に手を回すと、くぐもつた声が聞こえてきた。

「この前の話しは有効？」

控えめに、小さく、伺うように、一志が呟く。その姿に、胸が疼く。

「一緒に暮らすことか？」

小さく頷くのが身体に伝わってきた。ぎゅうと一志が上着を掴む。震えている。堪らなく愛おしい想いが湧く。

保護者としてでも構わないから、一志を傍に囲って置きたい。だから言葉がするりと流れた。

「遠慮なんかいらぬ。すぐにも越してくればいい」

背に回した手に力が籠もる。互いに密着するように抱き寄せる。温かい。一志もそう思ってくればいい。俺と一緒にいることで。

「ありがとう」

一志が答える。今は独占欲だけで一緒にいたいと思っている俺に礼を言うな。罪悪感が俺を襲う。苦しい。苦しくて息が詰まる。

「ありがとう」

再び小さく消え入りそうな声が聞こえた。あやすように背中を優しく叩いてやる。安らいで眠れるように。俺の精一杯の虚栄だった。眠りに誘われる一志を感じながら、自分の浅ましさに心が波立った。

俺はお前が思う程頼れる存在じゃない。ただお前が欲しいだけの

我儘な奴なんだ。そばにいて欲しいのは俺の方なんだ。

「ごめんなと口だけ動かし詫びる。腕の中の温もりは既に手放しがたくなっていた。このまま夜が明けなければそれが可能なのに。」

雨の音が無情に時の動きを知らせる。それが嫌で俺は目を強く閉じた。そんな事をして無駄なのは解かっているが抵抗したかったのだ。

息苦しかったのか一志が身動きした。腕を緩めると頭が少し上向く。そんな一志の頭にそつと触れる。髪を撫でる。頬に触れる。愛おしさが俺を支配する。同時に独占欲が頭を擡げる。

「早く越してこい」

眠っている一志の耳につい小さく口走る。束縛する呪文のように一志が俺と共に在る事を自ら望むように願いながら。

そんな俺の想いをあざ笑うかのように、雨音が激しく屋根を叩いていた。

scene・6 (後書き)

act・1 最終話です。済みません、もの凄く中途半端な終わりです。

本来は幸せムードで完結って考えていたのですが、一志の過去を設定した時点で「単純には幸せになれないな、この二人……」と思っ
たんです。

当初はこんなに長く書くつもりは全く無く、しかもここまで靖弘も
重い気持ちを抱く予定もありませんでした。こうなったのは全て一
志のせいです(T-T) ええ、ひたすら振り回されていますとも
!!

エロシーンは途中でぶった切ったみたいになっちゃって申し訳あり
ません。

15Rだとここまでかなあとって。

後は、手順も想像しやすいかなと、思い切って寸止めな感じにして
しまいました。

act・2 は同棲(?) 始めてからの話になる予定です。でも、
その前に1本一志の過去話を入れたいなあと思っています。一志サ
イドのタイトルは日本語で。

また暫しお時間を頂きますが、お気に召していましたら、次回もお
付き合いくださいませ。

作者の戯言（前書き）

前書き 本編とは関係ありません。

連載のタイトル元のお話しを試してみます。

「え、興味無いよお！」って方はサクサクっと飛ばしてくださいませ。

8 2 % A 3 % E 3 % 8 2 % B 0 % E 3 % 8 3 % B B % E 3 % 8 2 %
A 2 % E 3 % 8 3 % B 3 % E 3 % 8 3 % 8 9 % E 3 % 8 3 % B B %
E 3 % 8 2 % A 2 % E 3 % 8 3 % B 3 % E 3 % 8 2 % B 0 % E 3 %
8 3 % A A % E 3 % 8 3 % B C % E 3 % 8 2 % A 4 % E 3 % 8 3 %
B 3 % E 3 % 8 3 % 8 1

上記のURLがお話しの内容。使った歌のタイトルは対歌のある「
Wicked Little Town」。

<http://nicosound.anyapp.info/sound/nm7883561>

これは舞台のライブ盤の音源。こんな曲でございます。元歌ではなく対歌の方。

舞台の日本語歌詞とか原曲好きな方々からは不評だったようですが、自分は割と好きです。

舞台から観ちゃいましたからね。

いやあ、舞台がね、イっちゃっててまた良かったんですよ (<|>)

おっと、脱線しちゃいそうです！ 締めないとね！

まあ、こんな感じでタイトルが決まりました。

音楽には本当によく助けられています。

困った時や疲れた時に音楽って力を貸してくれるんじゃないかなあ
と思います

作者の戯言（後書き）

後書き 雑談にお付き合い頂きありがとうございました。

……済みません。リンク機能が上手く使えなくて、URLコピペして頂くようになっちゃいます(T-T)

一夜（前書き）

一志の過去話になります。
展開はB1じゃないので期待はしないで下さいませ。

一夜

家に帰ると、いつものように一人。

母さんは仕事で、夜はいつも家にいない。

中学に入ってからには部活があるから、一人でいる時間が少し短くなつた。

それでも帰つて来た時、家の中が暗いとやっぱり寂しいと思う。

特にこんな寒い夜は、心細さが大きくなつてる気がする。

「今日の夜は何にしよう」

つい独りごとを言ってしまうのは、人の声が恋しいから。

母さんは作り置きのおかずを幾つか用意してから仕事に出かける。でも、最近はそれだけだと全然足りない。だから自分でも料理を作つてる。家庭科で作つたカレーとか、魚のムニエル、茶碗蒸し。炒め物は適当に作つても結構美味しく出来るようになった。慣れつて凄いなと、こんなことだと思つたりする。

冷蔵庫を覗き込み、おかずと残つてる食材に目を通す。鶏肉があったから、冷蔵庫から出してテーブルに置く。これを焼いてメインにしよう。

ダイニングを抜けて一番奥まで行くと僕の部屋だ。

学生鞆を置いて着替えてから、居間へ戻って直ぐにテレビを点ける。別に見たいものは無いんだけど、静まり返つた部屋に一人にいるのは嫌だから、帰るとずっと点けたままにしてしまう。人の声

が聞こえていたら、何となくだけでも、誰かが居るって感じはするんだ。

いつものように、ボリユームをダイニングに微かに聞こえるくらい大きさにしてから、僕は調理台の前に向かった。

作り置きのおかずは、おからを煮たのと切干大根のサラダ、茄子の煮浸し。汁物は豚汁だった。

さっき出しておいた鶏肉に塩と胡椒をして、フライパンに火をつけてから、野菜室の青菜を二株出す。フライパンに油をひいて、鶏肉を入れてからフタをして蒸し焼き。その間に青菜を洗ってカット。豚汁も火にかける。

それから居間の机におかずを運び、鶏肉をひっくり返していたら、玄関のチャイムが鳴った。

ガタガタと忙しくなくドアノブが弄られている音がする。誰だろうと思っていると、小百合さんの声でした。

「開けてー、一志くん」

良く通るソプラノ。母さんの店の小百合さんだ。休みの時に、時々お惣菜や甘い物を差し入れに来てくれる。お姉さんというか、アネゴって感じの人だ。

慌ててドアを開けると、酔っ払いのオジさんのようなフラフラした足取りで、中へ入って来た。

「小百合さん、危ないよ」

小柄な小百合さんを抱き止める。そのままだったら靴も脱がないで上がり込みそうな勢いだったんだ。胸の辺りに小百合さんの頭がぶつかった。近づいた身体から甘い香水の匂いと微かにお酒の臭い。

いつも家に来る時は飲まない筈なのに。何だか変だなという気がした。

よろけた小百合さんは照れたように笑って「ごめん、ごめん」と謝りながら身体を離す。そうして台所の様子を見て、済まなそうに言った。

「あ、ごめん。もしかして、ご飯、これから？」

「うん。今日は部活が遅くなったから」

靴を脱いで小百合さんはガス台の前に陣取り、蓋を外すとフライパンを覗き込む。そしてまな板の上にある青菜を見つけると、それをフライパンに放り込んだ。

「これでOK！」

やっぱり酔っぱらってる？

勝手に料理（という程でもないんだけど）に手を出されて、僕は少し気分が悪くなった。

小百合さんは僕をほったらかし居間の畳に座ると、持っていたシヨルダーバッグを漁って何かを取り出した。

「お土産あるよぉー」

小瓶と小さな箱。お菓子かな。

ちらりと見てから、僕はフライパンの元へと戻る。

青菜を一箇所にまとめてから鶏肉をもう一度ひっくり返す。大きめのお皿を用意して、炊飯ジャーから保温されたご飯をよそって、フライパンの中身をその脇に乗せた。

お皿と一緒に箸とナイフを持って居間の机に運ぶ。豚汁を器に注いでもう一往復。

座ってから小百合さんを見ると、無表情でテレビのリモコンを弄んでいた。

「小百合さんは食事をしたの？」

返事が無い。もう一度大きめな声で名前を呼んでみた。

「小百合さん！」

びくりと身体が跳ねる。僕を見た小百合さんの目が一瞬とても暗く沈んで見えた。その目が少しの間あちこち彷徨ってから小百合さんは応えた。

「……ああ、食事、ね。してきたから大丈夫よ」

僕と机の上を見て、問いかけた事を想像してから答えたみたいだった。

やっぱり少しおかしい。何かあったのかな。テレビに向き直って

適当にチャンネルと変える小百合さんを見ながら、僕は気にしつつも食事を始めた。

いつもなら食事をしてても話しかけてくるような人なのに、小百合さんはずっとテレビを眺めていた。

目はテレビ画面に向いていたけれども、何も見てないみたいだ。時々チャンネルを変えては頬杖を突き直す。無表情で見ているその姿が僕は心配だ。

小百合さんが僕の方を見たのは、自分の食後のお茶のついでに、小百合さんにも湯飲みを差し出した時だった。でも気付いたのは僕が強引にお茶を渡したからかも。

「あ、ありがとう」

目の前の湯飲みに気付いて、目が覚めた時のような反応をする。ぼんやりして、何処となく目の焦点が合っていない感じ。その目に僕ははっとした。僕は自分の湯飲みに慌てて目を落とす。

小百合さんの目が潤んで光ってたんだ。泣いていたらどうしよう。どうしたらいいのか判らないから、顔が上げられない。

カサカサと微かに何かを探る音が聞こえる。ハンカチでも捜しているのかな。緊張して自分の心臓の音が煩く感じる。

「一志君に持って来た物があったんだ」

聞こえて来た小百合さんの声は、無理に明るい感じを出しているみたいだった。

「僕に？」

声に応えて僕は顔を上げた。小百合さんの目元がうつすら赤い。やっぱり泣いていたのかな。

「チョコレートとブランデー。お客さんから貰ったの」

さっき机に置いた小瓶と小箱の中身らしい。カサカサという音は包装紙を開けていた音だったんだ。

小百合さんが小箱を開けるとチョコレートの甘い香りがふわりと広がった。

「デザートに。ブランデーと一緒に食べると美味しいよ」

ブランデーってお酒だね。まだ未成年だから飲む訳にはいかないじゃないか。

僕はお酒を勧める為に迫って来る小百合さんを両手で止めた。

「僕、まだ中学生ですって」

「いいじゃん、ちょこつとだけ飲んでみたって。みんなそれくらいやってるってば」

それは無いと思う。小百合さんが面白がって小瓶を僕に押し付ける。抵抗して僕は小瓶を押し返す。そんなやり取りをしてたら、小百合さんが小瓶を鷲掴みにした。不意を突かれて僕は動きが止まってしまった。

「無理矢理飲ませてやるう！」

そう言っつて小百合さんは小瓶を呷ってから、いきなり顔を寄せて来た。僕が驚いていると、口移しでブランデーを流し込まれた。

喉に熱い刺激。それ以上に唇の感触にどきどきした。カツと全身が熱くなったのは、お酒のせいだけじゃないと思う。

「どっつ？」

上目使いで問いかけてくる小百合さんは艶めかしくて、その時初めて女の人なんだと意識した。まともに見られない。触れられた唇を手で隠すようにしながら僕は顔を背けた。

「やぁーん、真っ赤になってるう！」

冷やかすような小百合さんの言葉。仕方ないじゃんか、こんな事されるのは初めてなんだから。そう、初めて
改めて気付いて、
心臓が全力疾走した後のようになる。

「もしかして、奪っちゃった？ 初ちゆう」

「さ、小百合さん！！！」

言われると思いつきり恥ずかしい。心配してた気分が一気に吹っ飛んだ。

うつろたえる僕を見てケラケラ笑ってから、小百合さんは僕の頭に手を置いた。それから静かに優しく頭を撫でた。

「悪い悪い、ふざけ過ぎちゃったね。ごめんなさい」

謝ってから目元を拭う。それで僕は気が付いた。やっぱり小百合さんは、さつき、泣いていたんだって。

「一志くん、俺って言うてみない？」

「えっ？」

今度は真顔になって小百合さんはそんな事を言いだした。

覗き込んでくるその姿にどぎまぎする。

「小百合さん、近いつて」

頭を撫でられた後で、身体がかなり、触れそうなくらいに近い。甘い香りが僕にかかる。匂い立つってこんな感じなのかな。

僕は身体を離そうと横を向く。

「俺って言った方が男っぽいよ」

声が近い。小百合さんの声が囁くようで、何だか背中がぞくりとする。何なんだろうとか、これって。

「そう　かな？」

自分の声何だか遠い。

「絶対。身長だって高いんだから、絶対、その方が大人っぽいし素敵だと思っよ」

耳元に息がかかる。僕は思わず目を閉じる。

「ねえ、一志君。いつも一人で寂しくない？」

手が太腿にかかり、小百合さんの重みを感じる。

「　私は寂しいよ」

その言葉で僕は思わず小百合さんを見た。

今まで見た事が無い表情^{かお}。元気で頼り甲斐があるアネゴって感じは微塵も無い。誰かが支えていないと崩れてしまいそうな姿。

「今だけでいいから、俺って言うて」

縮るようなその瞳。僕は無言のまま頷く。何があったかなんて、聞ける感じじゃない。ただ、小百合さんの寒そうな姿は、自分と似ているように思えた。だから僕は手を伸ばす。

小百合さんの小柄な身体。背中に腕を回せば、僕の中^{うち}に納まってしまっ。

そつと包み込むようにしてから、自分の体温を移すように抱きしめる。

「ごめんね」

小さく啜り泣きが聞こえる。その振動が胸に響く。

「ぼ……俺で良ければ、小百合さんが落ち着くまでこうしてるから」

抱きしめたまま時間が過ぎる。小さく聞こえていた泣き声は、いつの間にか静かに消えていた。

身動きして、小百合さんが、俺の背中に腕を回した。

「ママが一志君に慰めてもらったらって言ったの」

「母さんが？ 何でだろうと考える。」

「優しいからって言った」

腕の力が緩んで、小百合さんが身体を離す。腕を解いてしまうと、開いてしまった空間をとても寒く感じた。

互いに顔を見合わせる。小百合さんの泣きそつな笑顔。それが自分を縛るように思えた。

手が伸びてくる。

頬に触れる。

掌が滑り、首を撫でる。

身体が竦む

「大人はこういう慰めが欲しい時もあるから」

小百合さんが手を取り、自分の方へと誘った。

「外してくれる？」

指を自分の服のボタンへ導く。抗えずに震える両手を操った。一つ一つボタンを外す。

全て外し終わると小百合さんが着ていた服とキャミソールを躊躇い無く脱ぐ。それから俺の服を脱がし抱きしめてきた。

「外して」

耳元で囁かれ、俺は小百合さんの背に腕を回し、ブラのホックを外した。

顕わになつた肌と肌が密着する。泣きたくなる程に心地よい温度。抱き締めるとより一層温かく心地よかつた。

「苦しいよ」

小百合さんの声で知らないうちに力が入っていたことに気付く。

「ごめんなさい！ 俺っ」

慌てて身を剥がすようにして離れると、小百合さんが泣きそうな顔をする。何でそんな顔をするのか俺には解からない。

ふと目にした小百合さんの姿に視線が止まる。晒された肢体は魅惑的で逸らすことが難しい。

気付いた小百合さんが小さく言った。

「電気、消してもいいかな？」

もしかしたらいけない事なんじゃないかなという考えが頭の奥に仄かに浮かぶ。でも、気付かない振りをする。

返事をする代わりに立ち上がって電気を消した。部屋に闇が広がり、その中で小百合さんが白く浮かぶ。

俺は白い影に近づいて膝を着く。

「触って」

甘い吐息が肌を撫でる。

言われるままに双丘に手を添えると、柔らかく温かい。

軽く体を前に倒すと、小百合さんは、俺に合わせるように沈んだ。

畳に散つた髪と彼女の顔。

細く白い喉に丸みを帯びた肩。

先程触れた両の膨らみ。

自分の下に敷かれた女性

熱く猛る何かが自分の内にある。それと同時に感じる渴望。

人恋しい。

温もりが欲しい。

満たされて眠りたい。

小百合さんと俺が欲しいものは一緒なんだ。

見下ろしながら、何だか泣きたい気分になってきた。

「泣かないで」

擦れた声がする。

差し出された手がやんわりと頭を包んだ。胸に耳を当てるように小百合さんに凭れる。

懐かしい音。心臓の鼓動に抱かれるような錯覚を覚える。

囁きかけてくるようなリズムに感謝するように俺は唇を落とした。

唇が肌に触れると、加速するかのように身体が動く。

小百合さんは小さく吐息を漏らす。

煽られるように俺もリズムを刻む。

温かく俺を包み込むような彼女の身体。

少し苦しげに見える表情と誘うような喘ぎ

ただ、夢中になる。足りていない何かを満たすように互いを求めていると思う。

泣きたいくらいに人を恋うる想い。

淋しさに凍えて寄り添ったけれど、二人とも解かった。これはほんの一時、淋しさを誤魔化す為でしかないって。でも、少しの間だけでも忘れたって思ったんだ。

触れている間は忘れられる。それを小百合さんが教えてくれた。

いつ眠ってしまったのか、俺は覚えていなかった。小百合さんに甘えるように抱きついていた事は覚えてる。きっとそのまま眠って

しまったんだ。でも、今、抱きついていたはずの小百合さんの身体が無い。

腕の内はからっぽ

跳ね起きる。寒さが身を刺すように襲いかかる。それで自分の上に蒲団が掛けられていた事に気付く。小百合さんが掛けてくれたんだ。机の上も綺麗に片付いていた。ただ一つ、ポツンと小さな指輪が残されていた。

シンプルで小さなグリーンの石が付いていた。小百合さんが大切な人から貰ったって良く言っていた指輪だった。左手に嵌めて嬉しそうにしてたのはいつだったろう。もう随分と前だったと思う。

小百合さんとはもう逢えない。置かれた指輪を見てそう思った。俺の心に大きな何かを残して彼女は去ってしまった。

指輪を掌に乗せて、そっと握り締める。温もりの名残を留めるように。心細さで胸が詰まった。

「小百合さん」

詰まりを流すように声を押し出す。

「あんな事したら、余計に淋しいじゃんかよ！」

一時感じた温もりが冷えたばかりの今は虚しさが大きくて、独り残った俺は堪らなくなつて罵った。

部屋には薄っすらと日が差し始めた。でもまだ寒くて仕方がない。力なく立ち上がる。握り締めていた指の力も抜け、指輪がするりと床に落ちた。転がり落ちた指輪が、日差しの入った場所へと踊り出た。光が反射が眩しくて、俺は思わず目を閉じた。

一夜（後書き）

わああああああー！！！！！！ 恥ずっ！！！！ って心境満載です！！！！

一志ってば、小百合さんに教えられた手順なのか？ 靖弘に対する行動は。

多分、良かったんでしようねえ。小百合さんってば、書かれていない所で手取り足とり……もごもご（これもちよつとヤバいでしょっ！）

こんな事を現実でやったら犯罪ですわよ！

小百合さんサイドで書いて並列投稿しようかなあとも思ったんですが、彼女の立場で書いたら辛すぎる。しかも大人だから犯罪承知でやってるんで、自己嫌悪も凄い。でも淋しさが勝っちゃってる状態だから止まんないし。暴走確実って予感。しかも鬱々した方向になっちゃうと思っ止めました

その代わり割り切った大人同士でのこういった話をもう1本の連載の方に書く予定。……好きじゃないんだけどね。話の展開上ネタが同時期に被っちゃただけ。興味がありましたらそちらも宜しくお願ひいたします（結局営業かよお！）

scene・1 (前書き)

なかなか更新出来なくて申し訳ありません。m () m <

act・2 はコメディ寄りの展開になると思います。

木戸つち周辺の人物紹介がメインなので、一志の出番が少ない事をご了承願います。

s c e n e . 1

引っ越し当日の昼だった。忙しく荷物を運び入れていると携帯が鳴った。

軽快なマーチが流れ、音に気付いた一志がこちらを見る。

「悪い！ ちょっと出る」

声を掛けてから作業の手を止め携帯に反応すると、声の主が面白そうに宣った。

「靖弘、若い子連れ込んだって本当かあ？」

携帯を取り落としそうになり手がバタつく。そんな俺を一志が不思議そうに見るので、尚更気持ちが悪くなる。

そう、言われた台詞は、ある意味、的を射ていた。

「ちい兄にい！ 何を根拠にそんな人聞きの悪いことを！！」

次兄が携帯の向こう側でくつくつと笑っているのが見える気がする。

歳が六つも離れているせいか、小さな頃から、どうも俺をからかって遊ぶのが習慣になっているらしい。俺を玩具とも思ってるんだろうか。そして妙に敏い。隠し事など、この兄にはことごとく気付かれてきた。今回も俺の動揺に気付いて変に勘ぐられたら……全く笑えない。

一志が電話の相手に興味を持ったのか、運びかけの荷物を降ろしてこちらへやって来るのも気になる。心の中で「来るな！」と叫ぶが聞こえる筈も無く、願いも虚しく一志は俺の隣にしっかりと収まった。

「何慌ててんだよ。もしかしてマジで連れ込んだのか？」

笑いながら言われる台詞に顔が赤くなる。多分、声は一志にも聞こえている。ちい兄のアホ！

内面での葛藤に夢中になっていると、手のひらが急に軽くなった。見ると携帯が姿を消している。いや、一志の右手に移動している！

「え……、つて、おい！」

喋るなど制止するよりも一志が話し始める方が早かった。

「初めまして。的場一志と申します。靖弘さんのご厚意で同居させて頂くことになりました」

滞ること無く自己紹介を済ませると、一志は身振りで俺に黙るように伝えてきた。こうなったら従うしかないんだろう。かなり不本意ではあるけれど、見ていることしか出来ない。というか、ここで携帯を取り戻して次兄と話したら、俺が徹底的にいじられまくる。だったらまだ酔い客のあしらいに慣れた一志の方が応対が巧い。

ぐだぐだ理屈を付けてみるが、次兄から逃げられたことにほっとしているのが真実。はつきり言えば一志が察して助けてくれた。嬉しいのか情けないのか判らない事態に何度か感じた自己嫌悪が顔を出す。

一志と次兄の会話は順調に続いていた。時々漏れ聞こえる次兄の声を気にしながら、近くにある箱を開けて中身を確かめる。一志の笑い声に安心していたのだが、どうやらそれが間違いだっただけ。会話の締めめに差し掛かったらしい所で、一志がいきなり不穏な事を口にした。

「ええ、そうなんですよ。 はい、今度一緒に伺わせて頂きます」
一緒に……どこに！ 咄嗟に思った。何の約束してるんだ、コイツは。

「その時に聞かせて下さい。楽しみにしています。連絡は靖弘さん経由でいいですか」

気さくに次兄と会う事を決めたらしい一志が、にこやかに失礼しますと言って通話を終えた。

「一緒に食事に行く約束しましたよ、お兄さん達と」
いや、俺はちい兄と食事したくないし！

一瞬、脳裏にドナドナの子牛が過ぎった。多分恨めしげな目で一志を見ているな、俺。小さくクリーム出ししようとしたが、次に続いた一志の言葉を聞いたら黙るしかなかった。

「兄弟三人つて賑やかだったんだろうなあ。なんか羨ましいや」
またまた自分の愚かさにも凹む。一志は精神的には俺より遙かに大人だ。環境がそうさせてしまったのを思うと何だか痛々しい。だから家へ引越すように勧めたのだが、家主の俺がこんなので大丈夫か？ 却って大人を強いる事にならないか？ 後悔は無いが不安が大きく押し掛かる。

沈黙してしまった俺を気に掛けてか、一志が明るい弾むような声で言った。

「食事は武弘さんが奢ってくれるみたいですよ」

次兄の名前の彰弘ではなく、長兄の名前が出た事に驚いた。

「だい兄も来るのか?!」

俺の台詞に一志が嫌そうに反応する。

「俺、さっき、お兄さん達って言いましたけど？」

「……悪い、聞き逃した」

次兄と食事という事の方が衝撃度が強く、そこまでは耳に入っていなかった。

しかし珍しい。考えてみると長兄とは子供 俺にとっては姪っ子が産まれてからは滅多に顔を合わせない。一志との同居を相談した時も電話でだけだった。割と近くに住んでいるのに、直接お礼もしていないなと思う。一志がそこまで考えて気を回したとも思わないが、鈍い俺にとってこれは非常に有り難いことだった。

「ありがとうな」

自然と感謝の言葉が出る。これまた気を使ってるのか、聞き流すようにして、一志は作業に戻った。

ただ、その後ろ首の辺りが心なしか朱を帯びているように見えた。何だかとても一志らしい行動に俺は小さく笑った。

s c e n e . 1 (後書き)

少々忙しい状態なので頻繁に更新が出来ないかもしれませんが、続けて行く意欲はあります！！

……完全に忘れないうちに覗きに来て頂ければ嬉しいです (^| ^ ;)
)

俺が一志を色々な意味で受け入れたあの日、というか翌日。

早朝、詳しい事情を述べないままの一志を送って、そのまま出社した。肉体的にも精神的にもいつぱいいつぱいだっただが、仕事は普段通りにこなさなければならなかった。しかし、不意に思い出される一志のことで、集中が途切れ、ミスが出る。

同僚の長谷が目敏くそれを見つけ、何だかんだと理由を付けられ、昼休みはしっかり会社近くの洋食屋に拉致られることになった。

「お前さあ、あからさまに『何かありました』って判るんだけど、実際の所どうなの？」

出された水を口に含んだ直後に聞かれ噎せる。一頻り噎せてから、俺は、俺なりに極力落ち着いたつもりで切り返した。

「どこをどう見たらそうなるんだ」

長谷が俺を上から下まで舐めるように見回してから「全部？」と宣った。

全部だつて？ 言われた台詞に打ちのめされた気分だった。フリーズした俺は、長谷が苦笑しているのに気付くまで、かなりの時間をかけてしまったようだ。

俺の呪縛が解けたのを確認してから、呑気に待っていた長谷が言った。

「凶星突かれて焦るのが木戸らしい。お前、絶対、人を騙せないタ イプだよ」

それから付け足すようにして「だから損するんだよ」と痛ましげに呟いた。

「……損って何だよ」

睨むように長谷に迫ると、彼は真顔で答えてくれた。

「騙し易いんだ。人を信じ過ぎて自分が傷つくぞ」

一瞬浮かんだのは一志の顔。寒さに震え、今にも折れそうな姿で

俺を見る。あれが嘘をつく者の姿か？

「そんな事は無い！」

気付けば大きな声が出ていた。そんな自分に驚く。

対する長谷は意外にも冷静だった。無言で俺を見てからグラスの水を口へと運ぶ。

「お前、相手の事に本気か？」

言われてたじろぐ。本気かどうかなんて、そこまで考えは行っていない。ただ、側に置いておきたい。アイツがどう思っているかなんて関係ない、自分の我が儘から出た欲だけで同居の件を口にした。俺は長谷から目を逸らす。すかさず長谷から言葉が投げられる。

「先の事は考えてるのか？」

考えてる……とは言えない。目の前に放っておけない人がいた。気付いたら目が離せなくなっていた。受け入れたのだって、その場での勢いでしかない。

気になっている相手が、今にも崩れてしまいそうな姿で現れたら、突き放すなんてとても出来ない。誰でもそうだと思っていると感じるのは間違っているだろうか。

賑やかな昼休みの光景とは真逆な重たい空気を纏う席は浮いていた。場の重圧に屈するように、俺は黙り込んだままだった。

その場にランチを運んで来た店員がそんな俺達に訝しげな視線を向けてから料理を置いて去って行った。

深い溜め息。長谷だ。椅子に座り直しテーブルの中央にあるカトラリーの入った籠に手を伸ばす。

「取りあえず食うか」

長谷に倣い俺も手を伸ばす。そうして料理を切り分け無言で食べ物をお口へ運ぶ。

確か店に入った時は空腹であったはずなのに、今は飲み込む事も重労働で味も判らない感じだ。午後の職務に耐える為だと義務的に咀嚼する。何とか平らげた頃には軽く疲れを感じていた。

俺が食べ終えるのを待っていたように、先に食い終わっていた長

谷が灰皿を手元に引き寄せ煙草に火を点ける。ゆつくりとくゆらせ
てから紫煙を吐き出すと、煙草を銜えながら、食器をテーブルの端
へ寄せ、スペースを作り左腕を卓上に預けた。トントントンと音楽
を奏できるように指先で軽くテーブルを叩く。その仕草が忙しない。
重い空気を引きずっているの、俺の方からは何となく声をかけ
辛い感じがした。多分、長谷も話す事を迷ってるんじゃないだろう
かなどと思う。

「……あのさあ」

テーブルを叩くのを止めて長谷が言った。

「俺、別に付き合うなどが、騙されてるとか言っていないんだけど」

「へ？」

言っていないのは解ってる。じゃあ、それをわざわざ言ってるのは
何でだ？

俺は本気で解っていないかった。

長谷が困ったといった感じで頭を掻きながら煙草の灰を灰皿に落
とす。

「心配してるの、お前の事を。一時の情に流されて付き合ったりし
て、面倒な事になりそうだから」

心配……されてるのか、俺は。そんなに情けないように見えるの
かと思ひ、肩を落とす。

「そんなに凹むな。俺は相手の事は全く知らないんだからな。最悪
の心配をしているだけなんだって」

必死に語る長谷が何だか可笑しい。ふと気が弛んで笑みが浮かん
だ。それを見て明らかにほっとした表情になった長谷がまた可笑し
かった。

俺に言わせればこいつの方が余程人が良いと思う。そう伝えたら、
照れながら「からかおうとしたらマジ反応されて、このままじゃ寝
覚めが悪いからだ」と言っつて、残っていた水を一気に飲み干した。

「じゃあさ、相談に乗って貰おうかな」

ここまで心配されて何も言わないのも悪い。俺は経緯を長谷に伝

えた。

失恋して飲んでいた居酒屋で一志と出会った事。家庭状況の事。

一志が家を出たがっている事。昨夜、どんな様子で自宅にやって来たのか。当然、一部は割愛した。

「そいつは受け入れるよなあ。お前だったら」

長谷に他意は無いのだろうが、出てきた言葉に焦る。そういう意味じゃ無いと判っていても過剰に反応する自分に頭が痛んだ。

長谷が腕組みしながら唸る。その姿を見て、こいつなら同居の提案なんてしないだろうと思う。他に住む場所を探し、頼まれた時だけ資金援助をする。そんな所じゃないだろうか。俺がそう出来なかったのは相手が一志だったからだ。

「あのさ、聞いてもいいか？」

長谷が遠慮がちに口を開いた。

「お前さ、その高校生の事……好き？」

飲んでいた水でまたまた噎せた。

何なんだ、いきなり。というかこいつ鋭い。

「ごめん、判った。俺に偏見は無いから気にするな！」

判ったって何だ！ 気になるわ！もしかしてさっきの受け入れる云々ってのは、その意味で言ってたのか？ だとしたら顔から火が出るくらいに恥ずかしい。

「何をどう判ったんだよ」

つい聞いてしまった声が囁きに近い小声であったのは、間違いだっただかもしれない。

長谷は周囲をはばかりながら身をかがめ顔を寄せて来た。

「一線越しちゃってる感じがするんだけど、多分間違っちゃいない……だろ？ 相手が女の子だったら、かなり問題だけだな」

いや、男でも問題あるだろうが！

真面目に考え込んでいた自分が変なのかと錯覚しそうになる。でも、もしかしたら、自分が思ったよりも深刻に考え込まなくてもいいのかもしれないと、ほんの少し気分は楽になった。

気分が軽くなったことに礼を言おうかと思つてゐる所に、姿勢を戻した長谷が煙草の煙を吹きかけてきた。俺は煙を浴びてそれまでの感謝の気持ちを書に放り投げた。

「ワザとやっただろう！」

テーブルに頬杖をついてニヤニヤ笑つてゐる長谷に俺は盛大に文句を言う。長谷は銜え煙草で空いた手で俺を指さした。

「その状態で会社に戻つたら、かなり恥ずかしいんじゃないか？」

何の事だ？ 食べカスでも付いてゐるんだろうか。いやいや、子供じゃあるまいし、そこまで間抜けな事は……してないよな？

自分は世間で言う年齢よりも中身が幼いのではないかと思つ事が続き、その事がこの得体の知れない自信のなさに繋がつてゐる気がして仕方がない。

不安な空気を発してゐたのか、長谷が見かねたように助け舟を出してきた。

「素直に顔に出るところ。俺にバレたからか表情が硬い。それから……」

言いかけてから長谷は煙草を軽くふかす。焦らされて俺はかなりイラツとする。

「話しを巻いてくれ！」

思わず時間の短縮を急かしてしまう。それにワザと対抗するように長谷はゆっくりと煙をくゆらせた。眉根を寄せた俺を見てから、煙を肺まで入れるように深く煙草を吸う。それから煙と一緒に深々と溜息を漏らした。

「他の奴らが午前中チラチラ見てるのに気付かなかつたか？」

俺は口元を押さえて顔を背けた。確かに言われてみれば無駄に視線が交わる回数が多かつたかもしれない。あれは見られていたからなのか。

「ただでさえ最近ボンヤリしてる事が多かつたんだから、こりゃあ、女子の餌食になつても仕方ないな」

「はあ？ 何言つてんだ」

呆れ顔の長谷が視界に入る。困ったように頭に手をやり、長谷は自分の髪を掻きむしり、投げやりな感じで話し出した。

「お前って、ちょっとキレイ系な顔じゃん。鑑賞物としては社内ナンバーワンなわけ」

「何だか物扱いなのが気にかかり、何処となく気分が悪い。そう感じている俺を尻目に長谷は構わず話しを続ける。

「それが心ここにあらずって感じで物憂げにしてる。失恋？ それとも恋患い？ とまあ、ここ最近、女子の話題を独占してんだよ、お前は」

長谷の芝居がかつた言葉と身ぶり。それから話された内容のあまりの事に俺は呆気に取られた。

「タバ休の時に聞かれたぞ。『木戸君と何かあったのか』ってさ」「何で長谷に聞くんだよ」

そこで気付いた。『木戸君と』の『と』って何なんだ？

長谷は短くなった煙草を名残惜しげに見てから灰皿に押しつけ火を消した。それから俺と自分を指差した後に、両手でハートマークを形作る。

「何でそうなるう?!」

出した声が予想以上に大きかったのは仕方があるまい。店内にいた人々がすぐに忘れてくれるのを祈ろう。

何、そんな風に見られてるわけ？ 何でだ。わからん！

頭の中をぐるぐると思考が回る。長谷は話しを続けている。

「俺は同期で同僚だろ。それに飲み会ん時に暗い話題を振ってから、周囲がかなり距離を取っててさあ。殆ど変わらずに接してくれてるのって」

それから長谷は俺から視線を外して「お前だけなんだ」と呟いた。「そこまでは解る。そこからどうしてそんな事になるかが解らん！」

俺は畳みかけて先を求める。長谷が嫌そうに目を細めて俺を見た。「俺は入社以来彼女がいません。浮いた噂もありません。近頃は一部のお姉さま方が妙な噂をし始めてました」

妙な噂…… 異性の話題が無いと、俺達の年齢だと上の方々が良く冗談でホモかと聞いてくるなと思ひ至る。酒の肴には程良いんだらう。納得して頷く。

「そんな時期に、お前の様子がおかしいって事になって、いつの間にか俺たちが互いに気になる存在に発展してるといふ展開になってたらしい」

「ちよつと待て！ どうしてそうなってるんだ！」

「さあ？ そこは妄想逞しいお姉さま方に説明を求めて貰いたいね」
長谷は大袈裟な身振りやれやれといった感じで両手を広げた。

長谷と俺がつてのは激しく誤解だ。どっかで誤解を解いておかないといけないだろうか。噂が広がると面倒だし、そもそも俺は男に興味は…… って、今は違うか。

パニくってる自分に上手く対応出来ずに考えだけが変に先走っている。向かいの長谷が若干イラついてきたように見え、慌てるのに拍車がかかってしまう。そんな内面をお見通しといった感じで長谷は強い口調で俺を戒め始めた。

「だから、そういった感じで正直に反応してるようじゃ、会社に戻ったって目立つだろうが！」

その通りだ。でもどうすればいいのか解からない。焦れたように長谷が俺の肩に手を置いて顔を覗き込む。

「まずな、溜息をつくな。それから難しいとは思うが、極力、相手の事を思い浮かべるな。思ひ出しそうになったら『業務中』って頭の中で唱えとけ！ この2つだけでもかなり違う」

無理ですとは言えない。目が泳いで長谷を避けようとしたが、「おい」とドスの利いた声で足止めを食らった。

「外見だけでも落ち付かせておけ。そうじゃないと噂に尾鰭が付いてどうなるかわからん」

長谷が真剣に語った。この感じだと俺を心配するというよりも自分に降りかかる火の粉を消したいって方が強いなと、頭の隅っこで少し思う。親切心は似非か？ などといじけた見方をしてしまうが、

言われた事も最もなので俺は頭を上下にコクコクと振った。

納得の意を得た長谷は、その時心底安心したように笑った。

「俺はその確約が取れば満足だ。相談や愚痴や惚気は俺が休み時間や退社後に聞いてやるから、仕事中は集中しろよ！」

かなり清々しい様子で長谷は言ったが、休憩中や退社後につるんでいるのを見られる方が噂になるんじゃないだろうか。長谷ってちよつとズしてるよなあと思いつつも、俺は気兼ねなく真実を相談出来る相手を得た事に小さく安堵した。

scene・2 (後書き)

木戸っち……書いていてバカ犬なの？　と行ってしまふ私を許して(T|T)

キレイ系で天然で愛され体質の彼は、周囲が勝手に世話してくれるので書いてる立場としては大変助かります　同時進行で書いている作品ではこうはいかないですね(^|^(;)

長谷にはモデルがいます。元のキャラクターは某小説の長谷です(笑)

生い立ちはどうちかって言うとその小説の主役に近いな(^|^(;) その作品の登場人物、先生について萌え話しがしたい！！　と思っているのですが、機会が無くて妄想だけが元気になってます(^|^(;)

これだけ書いたら判る人には作品タイトル浮かびそうですね

最終チェック時にお気に入りのヴァイオリン奏者のCDを聴いていて見事に落ちました。

寝るなあ！　うっかり文章消したらどうするう！！(前科者)

良い演奏ってキケンだと思いつながら、今後のBGMに悩んでいます(笑)

自宅で携帯を見つめながらそれを握り締める姿は我ながら滑稽だ。
 だい兄　長兄の武弘に連絡を入れる為にはそれなりに覚悟が必
 要だったりする。家の保証人になってくれているのだから、一志と
 の同居を認めてもらわなければならぬのだが　どう説明すれば
 いい？

　　昼に長谷に焚きつけられたこともあったが、俺としても早く一志
 を呼びたい気持ちが高い。それなのに携帯を持つ手が耳まで上がら
 ない。長兄は何と言っただろうか。

　　厳しい印象が強い長兄。というか、次兄の彰弘が軽過ぎるので、
 余計にそういつたイメージになるのだけれども。とにかく俺にとっ
 てはやや怖い存在でもあり腰が引ける。

　　一緒に住みたいヤツがいるんだけど　と口にした瞬間に小言
 を言われ始めるのではないかと思ってしまう。そっぴや、子供の頃
 もよく理屈っぽく説教されたっけか。

　　長兄は世間で言う良い子という部類の人だ。小さな頃から「しつ
 かりしたお兄ちゃんね」と言われ続けて育ってきたらしい。本人が
 それを快く思っていたのかどうか俺は知らない。でも、周囲に求め
 られ、しっかりと役目を果たしてきているのが、ずっと見てきた俺
 には判る。

　　放っておくとどこへ行ってしまいかかわらない次兄を叱りながら、
 幼い俺の手を引いて母の買い物に付いて行くなんて感じた。今考え
 ると昔から忍耐力があった人なんだなと思う。　いや、無駄に責
 任感が強いだけかもしれないけれども。

　　そんな長兄は今では大手企業の人事部所属だ。中小企業で割合気
 楽にデスク・ワークをしている自分は少し引け目を感じてしまう。

　　握り締めた携帯に目を落とし、俺は深々と溜息を吐いた。逃げて
 いる訳にもいかない。さっさと連絡してしまえば何とかたどたどし

くても説明出来て楽なのに。だが、判っていても中々身体は動かないものだ。

「本当にどう説明しよう……」
悩めば悩むだけ腰が引けていく。援護射撃が欲しいと切に願ってしまう自分が情けない。

手の中の携帯が小さく震えた。会社を引けてからマナーモードを解除していなかった事にそれで気付く。ディスプレイを見ると一志の名前が表示されている。俺は迷うことなく通話を選んだ。

「もしもし」

「」

無言のままだ。音声が届いていないという訳ではない。バイトに行く途中なのか、雑踏の音は微かに聞こえて来る。

「一志？」

名前を呼んだが反応が無いまま時間が過ぎて行く。そんな沈黙は不安を招く。

「どうした？ 何かあったか？」

耐えきれず声を掛けた。一志が何かに戸惑っているような感じがする。何度か言葉を発しかけるが、その都度飲み込み黙ってしまう。俺は耳に神経を集め、一志の気配を追った。

しばらくして携帯の向こう側から大きく息を吸い込む音が聞こえた。息と一緒に細かい一志の声が届いた。

「ごめんなさい」

俺は首を傾げた。何で謝られているんだろうか。そう思っていると、一志が小さく恥じるように言った。

「昨夜、俺の勝手で、あの　それなのに靖弘さん拒否もしなかった」

ああ、何で目の前にいないんだ、お前は。俺に拒否されるんじゃないかって思ってたんだろう。気にすることは無いと言って抱き寄せてやりたい。一志を想う胸の奥が微かに熱い。

一志の為に口にした言葉は、自分が思ったよりも甘さが混じった。

「馬鹿。いらん心配するな」

愛おしくて堪らない。その気持ちは一志には重いだろつか？

そうであっても、今は止めたいとは思わなかった。でも、想いを伝える事は出来ない。一志は恐らく、俺とは違った意味で俺を欲しているだけだ。保護者として、信頼出来る大人として　その立場を考えると胸に刺すような痛みが走る。

今の俺は泣き笑いのような表情をしているんだろう。嬉しいのか辛いのか判断がつかない。

「迷惑もかけちゃってるよね」

小さく伺う声が絶えるように聞こえる。これは恐らく同居の件だろう。あれだけ追い詰められたような状態だった癖に、まだ根の部分では決心つかないのかもしれない。まさか遠慮して断るなんて事を考えていないだろうか。

「俺よりデカイくせに、何弱気になってるんだ？　お前は」

努めて強い口調で俺は言った。だが心の中では焦っていた。同居の件が流れたら、一志との接点が失われてしまいそうな気がする。

嫌だ、そんな事は嫌だ！

子供みたいに我儘を言いたくなる。

黙っている一志に「何とか言えよ！」と急かしたくなるのを押さえ、俺は静かに耳を傾ける。

携帯越しでも伝わる、一志の迷い。

時折漏れる溜息を殺したような息遣い。耳が拾うその音で、昨夜を思い出し、背中がわななき、顔が火照る。こんな時に何で思い出しているんだ！　打ち消そうとするが、無駄な足掻きでしかなかった。

意識から追い出そうとすればする程、感覚の記憶が鋭く蘇る。息と体温と重み　肌を撫でる吐息が鮮明過ぎて生々しい。目を閉じると肌を這う手の感触までもがリアルに再現される。受け止めた重みと首元に受けた熱い息。落とされた唇の熱

「靖弘さん」

名前を呼ばれて息を呑み現実に還る。咄嗟に返事が出来ず不自然な間が出来た。一志が気付かない事を心底願う。

「あ、ああ。何だ？」

一志はすぐに言葉を継いだ。

「本当に世話になっていいの？」

言葉の裏に微かな不安が透けて見える。

「もちろんだ。お前は心配しないで準備が整うまで待ってる」

俺は一志の言葉を肯定し、同時に同居の選択肢が生きていることに安心した。

明言したからには急いで長兄に話しを通さないといけないと改めて覚悟を決める。

「でもさ」

一志はそこまで言い淀む。そうして再び詫びる。

「迷惑かけてごめん」

「そんな風に謝られると、信用されていない気分になるぞ」

思わずいじけて愚痴を漏らす。口調がどうも拗ねた感じになり、それを聞いた一志がようやく小さく笑った。俺にも笑みがる。

「ありがとう」

礼を言われて動揺する。

「何が？」

「心配してくれて」

「あ」

俺は天を仰ぐ。そんなに善人じゃない。後ろ暗い気持ちがある為に、どう返していいのか悩む。悩んでいるうちに、一志の方が先に口を開いた。

「話が出来て少し安心した」

一志の声は力の抜けた柔らかいトーンに変化していた。

「もしかして緊張してたのか」

口が滑った！一志が怒るかもしれないと、若干身構えて俺は反応を窺う。

「そ、そんな事はっ」

動揺したのか珍しく声がどもっている。

もしかして照れてる？

そんな意外な様子が可愛いと思ってしまう。近くにいたら腕の中に閉じ込めていたかもしれない。

「お、大人しく連絡待ってるから」

一志の誤魔化すような言い方に余計に笑ってしまう。

「笑うな！」

「はいはい、解りました。俺も早めに何とかするから」

少し優位に立った気分で俺はそう言った。ぶすつと剥れた一志が見える気がする。それがまた笑みを誘う。

「心配しなくても大丈夫だから、勉強とバイト頑張っとけ」

「わかった」

やや不本意そうに一志が答えるのを聞いてから「またな」と言っ
て通話を終えた。顔が自然とにやけてしまったのは仕方がないだろう。

s c e n e . 3 (後書き)

ここで一志が電話をかけてくるとは思いもしませんでした(^ | ^ ;)
恐らく、帰宅してから連絡を入れるまで「何て事しちゃったんだろ
う」と悶々と悩んでいたんですね。

一志からの連絡は、ちい兄にビビっている木戸っちには良い援護射
撃になったのではないでしょう。次話では頑張って連絡取って
くださいね、木戸っち！(笑)

一志に偉そうな態度を取ったからには、さっさと長兄に連絡を入れなければならぬ。

頭の中でざっくりと長兄の対応を想像してから深呼吸をし、思い切って携帯に登録してある連絡先を指定した。

繋がるまでの時間が一番嫌だ。繰り返されるコール音は回数が増す程に緊張を煽る。

「 だい兄、遅い！」

「 用件は何だ」

ボヤいた直後にぶつきら棒な声が来る。ヤバい、聞こえていなかっただろうかと不安になるが、それでも俺は虚勢を張った。

「 だい兄…… 開口一番それって酷くねエ？」

「 お前は用事がある時しか連絡を取らないだろうが」

「 ごもつともです。耳が痛いです。」

こういう見透かされているという感じが嫌なんだよなと、顔を顰めてしまう。

全く動じない長兄に、既にペースが狂わされているらしく、何だか落ち着かない。唾を飲み込み、一呼吸してから、俺は長兄に一志の事を切り出した。

「 だい兄、家に未成年を同居させてもいいか？」

「 省略し過ぎて判断が出来ん」

溜息を吐きながら言われた。でも、話は聞いてくれそうだ。

「 ソイツの家の事情が複雑でさ…… 大学受験もあるから、落ち着いた環境で生活して欲しくて、思い切って同居に誘ったんだ」

「 お前の家が落ち着いた場所と言えるのか？」

「 」

「 もう少し我慢したら、その高校生は一人暮らしを出来るんじゃないか」

状況を知らない長兄がそう言うのは解っていたつもりだったが、実際に淡々と語られるとかなり堪える。でも、やはり一志を一人しておきたく無いから、俺はきっぱりと言い切った。

「一人しておくのが不安なんだ」

携帯の向こうで長兄が押し黙る。その沈黙は重い。

「お前は」

反論が来るのを覚悟して相手がいらないのに自然と身体が強張る。しかし、返って来たのは予想していなかった言葉だった。

「何でそう面倒事を自分から引き受けるんだ」

ぼやくように言われたその口調で、昼間の長谷を思い出した。

心配してるの、お前の事を。一時の情に流されて付き合ったりして、面倒な事になりそうだから

困ったような顔をしていた長谷。もしかしたら長兄も同様の表情をしているのかもしれない。

だい兄も心配してくれているんだ。

そう思ったら、嬉しくて不覚にも瞳が潤む。

「全く仕方が無い奴だ」

言われた言葉を温く感じた。

「それで、相手はどんな子なんだ。色々と問題があるし、先の事も決めておかないといけないだろう。何よりもケジメをつけないとマズイだろう」

捲し立てられて怯む。先の事を決めるも何も、同居の許可を貰えればいいだけだし、ケジメと言われても、一体何にケジメをつける

と

「あ、アイツの親に話しつけなきゃいけないんだよな」

大事な事を失念していた。一志の母親にも許可を貰わないといけないんだ。これが一番大変なんじゃないだろうかと考えていると、長兄から雷が落ちた。

「馬鹿か、お前は！」

声の大きさに耳が痛い。先程の気持ち吹っ飛ぶ勢いだ。

「デカイよ！」

文句は続いた台詞に消された。

「お前は、そんなにいい加減なのか！ 先方の親の気持ちになってみる！ いくら事情が複雑だからと言って、未成年の娘を男に家に預けるんだぞ！」

「はあ？ 娘って何だよ！」

そう言えば、男だって話してなかったか。話しが通じてるんで思いつきりそこら辺は省略していた。でも、そう思われる方が普通か。ケジメつてのは婚約だのなんだのってことで、俺も一志が女だったらそれも良いかとは思うんだが いやいやいや、それとは問題が別だって！

動揺したのか、混乱した思考になっている。頭の中で右往左往している、ごほんと咳払いが聞こえた。長兄が気まずさで漏らしたのだろう。早とちりしたのを誤魔化すように長兄は喋り出した。

「まあ、男でも女でも未成年なんだ。先方の親御さんには、当然、許可を貰うのが筋だ」

真つ当な事だが、それまでの遣り取りを考えると少し笑える。自然と浮かぶ笑いを噛み殺して俺は出来得る限り真面目を装う。

「解った。なるべく早く向こうの保護者と話す」

携帯越しの長兄からは不愉快そうな空気が漂って来ているような気がする。これは笑っているのがバレたな。慎重にしないと長く説教をされる予感がする。

染み付いた記憶というのは恐ろしい。反射的に背中に嫌な汗が浮かぶ。

畳みかけるように追い詰める長兄の、ねちっこい探りを入れながらの説教は、昔から苦手だ。俺は、大抵逃げ場を失って、最後は半泣きで謝る事が殆どだった。

「その、親御さんって言っても、母親だけなんだよ。それで、夜の仕事に行ってる人で、出来れば一志抜きで話す方がいいのかなと思うんだけど、だい兄はどう思う？」

俺は質問という形で長兄に媚を売ってみた。それが上手く行くかは 運しかないな。

「一志ってというのが一緒に住む高校生か」

「そうなんだ。どうも母親を恨んでる感じなんだよな、アイツだから、交えて話すと荒れるんじゃないかと思ってるさ」

「靖^{やす}、どこでどうやって知り合ったんだ」

話しの腰を折るような質問が来た。

ここでそんな質問になるか？

しかも、その返答は正直に答えにくい。

居酒屋で潰れてる所を介抱された上に、一志の自宅へ泊めて貰ったとは、あまりにも恥ずかしくて言い辛い事実だ。

「それは、その いいじゃんかよ。問題にするとどこか？」

あからさますぎる。自分で言っても怪しいだろうと思っくらしいに。自分の軽率な言葉に呆れる。

案の定、長兄は細かく聴取する事にしたようだ。悔しいが誘導が上手いのは折紙つきだ。あれよと言う間に吐かされ、自分でも落ち込む事を言ってしまう。

「だから、一志は俺よりもしっかりしてるんだって！」

言っに言欠いてそれか。情けないだろう、自分。

吐き捨てた台詞に容赦の無い長兄の声。

「確かに、その彼と比べたら、末っ子のお前は面倒を見てもらう事になりそうだ」

真面目に返されると、自覚がある分、余計に凹むだろうが！と、思うことだけは許されるだろう。

「しかし、その彼も大変なんだろうな」

長兄は沈んだ声で言った。

「昨日も何だか逃げて来たみたいだった」

俺は一志の力になりたいだけなのに、これでは同情を引いているようだ。それが気にかかる。

俺は一志ではないし、アイツが経験してきた事を想像しか出来ない

い。そう、あくまでも想像だ。

時に人は自分の考えなのに、さもその人の事が解ったように思い込んでしまう。

それは傲慢なんじゃないかと思う。

だから俺は相手を知りたい。何を考えて何を思うのか。一緒に進んで行けるように。でも、一志とはそれ以上に共にありたい。

「責任は重いと解ってるのか」

「解かってる」

自分に言い聞かせるように口にする。それからもう一度、忘れてしまわないように、重ねるように繰り返す。

「解かってる」

長兄が言う責任の重みは保護者の責任だ。だが俺には自分への堅い戒めの鎖だ。自分の気持ちに素直になると、歯止めが効かなくなるだろう。保護者という立場は一志との付き合いに境界を引く事を意識させる。長兄に宣言することで、俺は枷を強化したかった。

「だったら同居の件は許可する。ただし、問題が起きた場合は俺が介入するからな。その場合、何があっても口出しするな」

最悪の事態を想定して言ってるのだろう。

長兄にとって、一志は得体の知れない人物なんだ。それは仕方が無いと思う。しかも、まだアイツの親とはコンタクトを取っていない。当然、揉める可能性だってある。

恐らく瞬時に判断して長兄は俺に釘を刺した。問題が起きた場合、当事者よりも第三者の方が冷静な対処が出来るかと踏んだのだろう。

こんな所を見せられると到底長兄には敵わないと思う。

「解かった。何か問題が起きたら、だい兄に頼む」

問題なんか起きない。心で呪文のように何度も繰り返す。それでも不安が口をつく。

「だい兄 どう言えばいいんだろう」

「何を」

長兄が怪訝な様子で聞いてくる。

「一志の親に、俺は何て言ったらいいんだろう」

話しをつけるとは言ったが、具体的に考えると、どういいうい方をすればいいのか判らない。

戸惑っている俺を落ち着かせるように、長兄はゆっくりと意見を伝えてきた。

「そのまま言えればいい」

「でも、俺は一志が今の家にいたくないって思ってるから、自分の家に同居させるなんて言えない」

長兄には話せないが、一志の母親の店員が時折アイツに慰めを求めている。それは母親の指示だとアイツは言う。だから家を出たいのだと。

もしそれをそのまま伝えたら、母親はどう出るだろうか。全く判らない。だから躊躇う。

「いつか言わなければいけないことだ。だったら早いうちに正直に話せ」

長兄の言葉も当然だと思う。考えが揺れる。

「俺は間接的にしか母親を知らないんだ。正直に話したら、逆上する人かもしれないし、反対に何も干渉をしない人かもしれない。会ってみてから、全てを話すかどうか判断しては駄目かな」

俺は正直な気持ちを長兄に吐露した。

「どんな人物であっても正直に話せ。後で揉めるよりも楽だ」

「だけど」

溜息が聞こえた。

「靖、リスクは最小限にするに限る。一番初めに真実を話して人物を判断しろ」

厳しいと思ってしまう。それで思わず口応えしたくなる。

「でも」

言葉を続ける事を許さないように長兄が言う。

「信用されたければ本心を話せ。へたな小細工をすれば、母親は子供を預けないぞ」

ああ、その通りだ。俺が親でも確かにそう思うだろう。

黙り込んでしまう俺に、長兄が労わるような声音で話しかける。

「お前にはかなり大仕事だと思うが、一志君の為にも力を出せよ」
一志の為。

この言葉は効いた。挫けて沈みかけた気持ちが浮上する。同居の件を持ち出したのは俺だ。俺がやるべき事だ。

「言い辛いけど話してみる。それくらい言えないと保護者なんて出来ないよな」

「当たり前だ」

軽く笑いを含んだ声。これは長兄の癖だ。嬉しい事や誇らしい事を感じた時に良く出る癖。

失望させる訳にはいかない。

「だい兄　ありがとな」

呟くように伝えた礼は、自分の耳には何だか不貞腐れているように聞こえた。

scene . 4 (後書き)

木戸うちには良く予定とは異なる言動をいきなりされます。

今回はいきなり「アイツの親に話しつけないきゃいけないんだよな」とか言われました (^| ^ ;)

……振り回されて、何処へお話しが着地するのか段々と判らなくな
ってきています (^| ^)

一志に連絡を入れたのは数日が過ぎてからになった。仕事を立て込んでいた事もあったが、少し考えたかったという部分も大きかった。

母親に会って同居の許可を得たい。そう申し出たら、一志は素直に頷いてくれるだろうか。

そうは思えないんだよなあ。

溜息が出る。俺は一志を近くに置きたいけれど、アイツは今の家を出られるならば、俺がいなくてもいいと思っっているのではないだろうか。そう考えると怖い。引き止める力が今の俺には恐らく無い。考える程に気分が落ちる。でも話さなければ応えは得られない。

「話しがあるから会えないかな」

俺は気分が落ち切らないうちに一志に連絡を入れた。

「うん、今週は土曜ならバイトも無いからいいけど」

応えた一志は明るく予定を伝えてきた。その声になんとなく罪悪感を感じ胸が疼く。極力平静を装って話す。

「じゃあ、土曜に。場所はどつする」

「夕方に何か買って靖弘さんの家に行くよ」

「悪いな。助かる」

「声が疲れてたからね」

何気なく言われた言葉に気遣いを感じ、俺は自分の未熟さに気付く。声に気持ちが出ていたのだ。沈んだ声音は一志に届き、心配されてしまった事が心苦しい。

「俺、情けないな」

知らずに呟いた言葉に一志が笑った。

「何言ってるの。気楽な学生と違うんだから当たり前じゃん」

一志は決して気楽な学生なんかじゃないのに、そんな事を平気で言う。敵わないと思うのはこんな所だ。

「じゃあ、申し出に甘えて、ゆっくり待ってるな」
苦笑しながら伝えると、一志は携帯の向こうで笑いながら「待ってよ」と言った。

スーパーのビニール袋を片手に、土曜の夕暮れ時に一志がやって来た。ドアベルが鳴ったので、のぞき窓から一志を確認しドアを開けると、目の前に大きく膨れた白い袋を突き出された。
「ろくなもの食ってなさそうだから台所借りる」

開口一番そう言われた俺は一志にどう思われているんだ。釈然としない気分で俺は一志を家へ上げた。

「お前なあ、年上を敬う事を知らないのかよ」

「知らないって訳じゃないけど、靖弘さんって……」

一志が少し考え込んだようになる。

なんでそこで止まる！

声に出して突っ込めないのが情けない。黙って続きを待つてしまうのも虚し過ぎる。

「何て言うのかな？ 面倒みたくなくなる感じがするんだよね」

「何じゃ、そりゃ！」

頼りないってことか、情けないってことかあ？！

一志が困ったように笑う。

「放っておけないっていう感じ？」

「それはお前の事だろうが！」

反射的に応えていた。一志が言葉を聞いて大きく目を見開く。言ってしまった本音はマズかっただろうか。

一志がどう思っているのか気になるが、それ以上に気まずさが勝り、俺は口元を押さえ一志から目を逸らせた。

何言っちゃってるんだよ、俺！

視線が気になって羞恥で顔が熱い。

「あ、あのな、深い意味は無いんだぞ。ただ気になって仕方が無い

だけで……」

言い訳が墓穴を掘ってる。変に勘ぐられるのは避けたいのに、何でこう言ってしまうんだろうか。黙っていれば良かったと後悔するが、言ってしまった事は戻せない。

左肩口に何か当たった。見ないで手だけで探ると覚えのある感触に当たる。一志の髪だ。頭を俺の肩に乗せ、預けるような感じだ。「重い」

本当は心地良いその重みを消しさるように邪険に扱おうとしたが、それは簡単な事ではない。気がつけば一志の頭を左手で撫でていた。これは本気でヤバいって。

頭を撫でながら思っていたのはそんな事だ。

触れてしまえば押さえが効かない。こんな不意打ちのような接触は理性を飛ばしかねない。視線を一志に向けたら、どうなってしまうのか判らない

「茶化してごめん」

一志から呟きが漏れる。

「靖弘さんが本気で心配してるんだって、よく解った」

肩口の重みが無くなる。名残惜しさに思わず手が出そうになるのを俺は堪えた。顔は見れない。見えるワケない！

それを勘違いしたのか一志がおずおずと聞いてくる。

「もしかして怒った？」

この馬鹿！ 俺にどうしろと言うんだ！

両手を伸ばして抱き寄せたい。だけどそれは駄目だ。

目を閉じゆっくり息を吸い込む。少しは衝動が落ち着くだろうと思いついた行動だったが、一志はそうとは思わないだろう。

「怒ってないけど困った。あんまり年上をからかうなよ」

上手く笑えてるだろうか。不安に感じながらも伏目がちに一志に視線を向けた。どんな顔をしている？

伺い見た一志は、ほっとした様な表情をしていた。俺も胸を撫で下ろす。顔を上げると少し高い位置に一志の顔が見えた。

「お前、人の様子を気にし過ぎ。そんなにビクつかなくてもいいのに」

右手を伸ばし、一志の触り心地の良い髪に指を差し入れ、くしゃりと翳る。

「やめるよ」

弱い抵抗を示して一志が身を引いた。耳まで真っ赤になっている。こういう触れ合いには慣れていないのだろう。そんな姿を見てしまつたら、つい悪ノリしたくなつた。

「お前、可愛いなあ！」

逃げ出した一志の頭を、改めて両手で捕まえ、わしゃわしゃと掻き回す。

「鬱陶しい！」

声は大きいが一志は本気で嫌がつてはいないようだ。弱々しく腕で払うように、形だけの抵抗を見せる。

暫く戯れてから、俺たちは転げるように居間へ上がり込んだ。

「何なんだよ、ふざけて！」

などと言いつつも、一志は楽しげに笑っていた。こうしていると実際よりも子供っぽい。俺の前ではこうして気兼ねなく過ごして欲しいと願ってしまう。その為にも、一志に聞かなければならない事がある。今の気分を損ねてしまつかもしれない。それでも

空気が変わったのに気付いた一志が怪訝な顔をする。座り込んでいる俺の顔を、向かいに座って覗き込むようにして見ている。

「あのさ」

言い出し辛いが口にする。真面目に耳を傾ける一志に詫びるように話しかけた。

「同居する事、お前の親に了解貰わないといけないだろう？」

そう言つと一志が嫌そうに顔を歪める。

「自分で言うからいいよ」

「そういう訳にもいかないだろう。お前はしっかりしてるけれど、まだ、一応未成年なんだし」

頑なに黙り込む一志が見ていて可哀想なくらいに痛々しい。未成年という事で縛られるのが嫌なのだろう。成人していれば俺がこんな事を言うことも無かった。一志は、今、悔しい思いをしているかもしれない。それでも俺は言わないで済ませる事は出来ないのだ。

一志が真っ直ぐと俺を見て、小さく問うように呟いた。

「もし一人暮らしをするって俺が言ったら、靖弘さんは母さんに会うのを辞めてくれる？」

何でそうなるんだよ！

予想してはいたが、実際に言葉を聞くと流石に苛ついたので、返す言葉には棘があった。信用されていないような気が痛烈にしたのだ。自分で思っているよりも言い方がキツイのは、そんな気持ちを表に出たせいだろう。

「どういう意味だ、それ」

不愉快そうな俺の声を聞いて一志がそっぽを向く。それがまた勘に障る。俺は先程よりも更に強い口調で、一志に、恐らく聞いて欲しくないだろうということを聞いた。

「お前はそんなに俺を母親に会わせたくないのか」

一志の肩がビクリと跳ねた。背けていた顔を俺の方へ向け直し、挑むような視線を投げる。

「会わせたくねえよ！」

強がってワザと怒鳴っているのが、一志の微かに震える手から判断が出来た。

「一志 お前さ、何で会わせたくないのか教えてくれないか。そうじゃなきゃ俺の方が納得出来ない」

一志が両手を硬く握り締めるのが見えた。先程とは異なり視線が逃げるように揺れる。

「靖弘さんには迷惑かけたく無いんだ」

「それだけじゃない」

俺はきっぱりと言いつつ切った。予想は何となくついていた。

「もしかして恥じてるんじゃないか？」

一志の顔色が変わる。

「親の仕事を恥じてないか？」

俺は一志を追い詰める。

ああ、泣きそうな表情だ。

けれども弛めることはしない。

夜仕事で家を空けてばかりいる一志の母親。店の娘。このメンテナンスに息子を宛がうような事をするコイツは言う。そしてそれらの事をコイツは全て恥じているんじゃないだろうか。

恐らく親を信じていない部分もあるのだろう。

擦れ違う生活が長いから、碌に話しも出来ていないんじゃないか。慕いたい時に傍にいない。その時に感じる喪失感を何度も何度も繰り返す。繰り返して過ぎて諦め、甘える事に蓋をする。その分嫌に大人びた子供になって行く

思い込みは避けたいが、一志の様子からは凶星を突いた事が読み取れる気がする。

表情を隠すように俯いた一志の姿は、膝を抱えて蹲る小さな子供を連想させた。

「人に言ったら何を言われるか判らない。

ポツリと漏れたのが本音なんだろう。一志は俺から視線を逸らしたまま続ける。

「正面からも陰からも悪く言われる。家の前で堂々と嫌がらせをされることだってあったんだ」

そこで大きく息を吸い込み俺を見る。

「あんたがそんな連中と同じだとは思わないけど、母さんに直接会ったら、直接会って、俺と、今までと違った接し方になったらって

「

一志の言葉が詰まる。

「どうした？」

促すと静かに流れた。

「あんな風に見られるのは嫌だ」

どんな風にとは聞けるはずも無かった。

職業やシングル・マザーに対する偏見はまだ残っていると一志は暗に言うのだ。好奇心と冷やかな見下す視線　そんなものを浴びてきたのだろうか。今の住居ではどうなんだ。考えると心配だけが降り積もる。でも、不安な様子を顔に出したら駄目だ。

俺は手を伸ばし、一志の頭を軽く小突いた。

「お前から話しを聞いてるし、家　うち　のちい兄に比べればお前の母親の方がしつかりと仕事をしていそうだぞ」

胸の内で例えに利用した次兄に詫びる。

微かに一志が笑んだ。その笑顔が何処となくぎこちない。

「あのさあ　お前、母親が嫌いか？」

俺はそう思っていたので、何も考えずに口を滑らせた。

「え？」

それは一瞬だった。呆気に取られたような不思議そうな顔。

嫌いななんて思ってもいない……のか？

家を出たい。でも親が嫌な訳ではない。恨んでいるような素振りは見えた。それから俺には親と会わせたくないと思っっている。これはどう考えればいいんだろうか。

何が何だか判らん！

俺の方も呆気に取られたようにポカンとした表情をしていたのだろう。一志が呪縛を解くようにゆっくりと息を吐いた。

「俺さ、母さんは嫌いじゃない。でも恨んではいると思う」

俺は一志の言葉に頷いた。自分の内を探るようにしながら一志が口を開く。

「感謝してる。有難いとも思っている。でも　」
言葉を探しているのか瞳が惑う。

「　でも、傍にはいなかった。ずっといない。それがどれだけ淋しいかって、もしかしたら、母さんは想像した事もないんだろうかって思うと、俺は　」

その先は続かなかった。俯いて黙り込む。にじり寄ると思わず手

が出て、俺は一志の肩から背中にかけてを、あやすように大きく撫でていた。

「一緒の家に住んでいても、一人きりの時間が多いのは嫌だよな」
頭が胸にもたれかかって来る。

「俺だったら出来るだけ傍にいてやるから」
正直な気持ちだ。その言葉を聞いて、一志の腕がしがみ付くように巻き付いてくる。

俺は躊躇いながらも応じるように、一志を抱き込み、背を撫でてやり、頭を撫でてやる。

始めは硬く強張ったようになっていた一志の身体が、撫で続けていると次第に緊張を解くように弛緩してきた。安心して落ち着いたのか、静かに俺から離れようと腕を解く。

「もういいのか？」

自分の口走った言葉に名残惜しげな音に乗っていたことに、俺は心底焦った。過剰に触れ過ぎていたから欲が出る。急に一志を意識し、己の急ぎ立てるような鼓動で身動きが取れなくなる。

この鼓動、一志に気付かれてたら軽く死ねるぞ！

馬鹿な考えが浮かぶ。自分でも鬱陶しいと感じる程の鼓動に戸惑っている、一志はそれを倍加させるような事をしてきた。

戒めを解いて身を起こすと、自然と俺の肩に頭を乗せる。

「ちよ、一志」

かかる息。頬や首筋に当たる髪。乗る重さ。それから温かさ。頼むから、俺を困らせないでくれ。

「本当に傍にいてくれる？」

耳元へ囁くように聞いてくるなんて性質が悪い。さっき撫でていた背中に回した腕に力が籠もる。

「何があっても傍にいてやるから」

肌を撫でる髪の動きで、一志が小さく頷いているのが判った。このまま抱き締めていたい欲求が掻き立てられ、気を抜くとどうにかしてしまいたいそうだ。

俺は背中に回した掌を懸命に彼の肩まで移動させた。肩を掴み、ゆっくりと引き離す。俯いていた顔が上がり目が合った。その瞳に戸惑う。

熱を帯びたような強い眼差し。見られていると落ち付かない気になるそんな視線

時間が止まるかのように感じた。惹き込まれそうになる。意志の力で衝動を抑えようと懸命に足掻いた。

両腕が伸びきるまで一志を遠ざけ、視線を下へとずらす。あの眼差しから逃れるように。

「靖弘さん」

切なげな声。声に負けて一志を見たら危険だ。顔を上げるな。

一志の手が俺の手に触れた。反射的にそちらを見てしまう。筋張った大きな手。力は一志の方が強いだろうなと思って、変な緊張で身体が強張る。

本当にどうすりゃいいんだ。

これ以上は動けない。自分の呼吸音も心拍音も恥ずかしいくらいに聞こえている気がして、意識すればその分、どちらの速度も上がる。無理矢理押さえようとして息苦しさで辛い。時間を物凄く長く感じ、忙しく目を瞬く。

一志の手が落ちた。聞こえるか聞こえないくらいの小さな溜息が一志の口から漏れる。どういった溜息なんだろうかと気にはなっていたが、緊迫した空気が去った事に俺は安堵した。

顔を上げると一志が財布から何かを取り出している所だった。

「母さんの名刺」

手渡されたのは鈴蘭を背景に使った、上品で清楚な感じがするデザインの名刺だった。

「俺が一緒にいない方が話しが進む気がする」

不本意な台詞なのだろうと判る程に表情が険しい。その表情の中にある先程の強い眼差しとは打って変わって不安な様子が浮かぶところどころ変わる一志の瞳に振り回されっぱなしだ。だが、そんな

状況が何故か嫌ではない。

俺は不愉快そうな一志の頭髪をくしゃりと混ぜ返した。

「ありがとな」

剥れた様子で下を向く一志に、俺は柔らかく謝意を伝える。そんな俺の心の中には長兄が言った言葉が浮かんでいた。

どんな人物であつても正直に話せ

俺は一志に内緒で聞かなければいけない。コイツが話した母親の事が事実なのかを。その事が実母に対し複雑な想いを抱いている一志を裏切る行為のようで心苦しい。

嫌われるかもしれないな。

それでも、確かめるべきだ。嫌われる事は嫌だが、一志が抱えたものが軽くなるのなら、それでもいい。

一志の言う通りの状態であつたら、俺が母親に厳しく言ってやる。だが、万が一誤解を生んでいるだけなら、何とかしてやりたいと思う。

目の前の一志を、俺は今どんな感じで見つめているのだろうか。

一志に変に思われていなければいいのだが。そう考えている自分が

一志を騙している気がして仕方が無い。嫌な気分だった。

「直接、俺が連絡を取っても構わないな？」

心とは裏腹に口からは淡々と許可を求める言葉が出る。

「勝手にしろよ」

一志は顔を上げない。俺は表情を見られないで済む事に安堵した。顔を見られていたら、聡いコイツは考えを読み取ってしまっただろう。息を殺し苦く笑う。気持ちを切り替えなければと自分を鼓舞し、それから軽く一志の頭を叩いた。

「何だよ」

ようやく顔が上がって一志が俺を見た。その顔に笑いかける。

「まともなモノを食わせてくれるんだろう？」

硬かった表情が緩んで心底呆れたといったように変わる。

「あんたは、俺が深刻な気分ているのが解ってないのかっ！」

「解かってる、解かってる」

何も無かったかのように笑ってみせる。それを一志はどう取るか。

「 供扱いするなよ」

ブツブツ濁すように呟いた一志は、拗ねた子供の顔をしていた。

scene . 5 (後書き)

まずは投稿が遅くなって申し訳ありません。月1回更新出来れば良いのですが…… 出来得る限り頑張らせて頂きます。

気がつけばもつと先に書くこうと思っていたエピソードを書く破目に陥っていました。この二人は予定外の行動ばかり起こして下さいます。一志はこんなに出てくる予定じゃなかったのにな。おかげで兄弟お披露目お茶会だけの予定だったのに、お茶会シーンにはいつ入れるか判らなくなってきた(^ | ^ ;)

今回の話を書いている途中に某劇団の再演舞台を観てきたのですが、どうやらその主役が一志の種だったようです。自分でも驚きましたよ(笑)

鈴蘭の名刺。俺はそれを片手に佇んでいた。

「君影草」という名前の店。水商売ということで裏通りにあるパブのような外装を予想していたが、そういった感じでは無い。何処となく敷居が高そうな感じが漂っている。

真鍮製の看板が小さく掲げられ、細い格子戸と手水鉢、それらにあしらうように緑の低木が植えられている外観。まるで高級料亭のように見える。料亭も水商売ということでは同じだが、一志の話の様子では風俗といった色合いが強かったので、正直、この外見に怯んでしまっている。

これはどうなんだ。こういうのはアリか？

客を選ぶ造りに立ち尽くす。実際、客として入るつもりでいたから、財布の中身も気になってしまふ。それ以前にいちげん一見で入れるのかも判らない。

名刺のデザインを見た時に予測くらいしておくべきだったと自分の推測力の無さをなじりたくなる。

ちい兄　次兄の章弘に同行を頼むべきだったろうか。仕事柄、こういった店にも顔が利く。色々と教えて貰えたかもしれない。飄々とした態度で入店して行く姿が容易に浮かぶ。

だい兄　長兄の武弘だったらどうだろう。自分と違って大手企業の人事部努めだ。長兄には何処となくそぐわない気がするが、こうした場所に慣れていないわけがない。

どちらにしる、自分は兄達と比べるとごく平凡な人間だと感じる。二人を思い浮かべると、やはり凹んでしまう自分がいるのだ。

それを一志に愚痴った事があった。一志はやんわりと笑顔を浮かべながら俺に言った。

「靖弘さんのところって、かなり歳が離れているでしょ。単純に歳の差だけ経験値が低いだけだよ」

言われてみれば確かにそうだった。

「お前、悟ってるなあ」

感心してそう言っていると、一志は少し視線を逸らしてから拗ねたように呟いた。

「そうじゃなきゃ、俺なんてずっと凹みっぱなしじゃなきゃいけないよ」

そうだ。一志の周りには大人が多い。周りと比べて背伸びをして、無理した事もあったのだろう。その姿から俺はそう感じた。

一志は基本的には人を頼らない。大抵、自分で何でもこなしてしまふ。俺には一志が頼るといった行為をあまり経験して来なかった為に、人に頼る事が出来ないのではないかと思える。

時折、俺に不器用に甘えて来る仕草でそう感じたのだ。おずおずと伺うように近寄り、気付かれると戸惑って声を荒げる。本人に自覚がないのを見ていて痛い。距離感を計りかね、自分でも困っているように見えるのだ。

甘えるのは人を頼りにする事の一部だと俺は思っている。だから甘え下手な一志を見ると、もっと人を頼ればいいのにと感じてしまふのだ。

そんな一志の為に、ここは何とか店内に入らなければならぬ。それでも中々踏み込む勇氣が出て来ない。店前で躊躇っていると、カラカラと音を発て、格子戸が内から開いた。

「何か御用でしょうか」

店内から見えたのだろう。和服姿の女性が顔を出す。

彼女が俺を見上げる眼差しが一志と被った。一志の母親だと直感する。

「あ、あの　一志君のお母さんですか？」

声が緊張で裏返る。しまった。これではただの怪しい人物だ。言ってしまうからでは印象は拭えない。嫌な汗が伝う。

顔を出した女性は、一瞬、そんな俺を訝しげに眺めてから、真顔で口を開いた。

「一志が何かご迷惑をおかけしましたでしようか」

その口調と態度で女性が一志の母親だと知れた。

「いえ、その、そうではなくて」

俺は返答に困ってしまった。一志に抱いている想いも手伝い、口が重い。

無言の俺に、何を思ったのか彼女がやんわりと一志に似た笑みを浮かべながら言った。

「こちらに立つたままでお話しするのも申し訳ないので中へ入りませんか」

柔らかい物腰で誘われる。こんな不審そうな人間を店内に入れてもいいのかと思わなくもないが、その流れに従って俺は店内へと足を踏み入れた。

間接照明を使った店内は、薄暗いというよりは落ち着いた雰囲気であふれていた。品が良い感じがする。和洋折衷といった感じでソファの置かれたボックス席が数ブロック、カウンターの席も少数ある。女性従業員の衣装もやはり和洋折衷で、友禅や銘仙、綸子や絞り染めの生地を使ったロングドレスを着用している。どの店員の背中も胸元も大きく開いていて、ドレスのスリットも深い。目のやり場に困り俯く。

「こちらへどうぞ」

最奥のボックス席に案内され、上座を指定される。緊張でガチガチの身体を滑り込ませ、印伝革を張ったソファに沈み込むようにして座った。店員から投げかけられる視線を感じる。場慣れしていない自分を珍しがってるのかもしれないと思うと益々身体が固くなった。

少し意識を逸らしたいが一心で、黙ったままで着物姿の彼女を見た。薄緑の地色にグラデーションをかけるように白い花が散っている。帯は濃緑。クリーム色の帯締めと帯上げ。主張し過ぎない上品な配色であり、店名を思い起こさせるものでもある。

少し気持ちが悪く落ち着いた所で、タイミング良く相手が口を開いた。

「私の事は鈴と呼んで下さい。差し支えなければですが」

一志から受け取った名刺には細い明朝体で的場鈴とあった。すずりん、れい。単純に読んでも三通りあったため、確かに呼び方に困ってはいた。こんな気遣い方も一志に似ているようだ。

「お気遣い頂きありがとうございます」

慌てて頭を下げる。それから気が付いた。自分の事を何も伝えてはいない。またもや泡を食う。

「申し訳ありません。自己紹介がまだでした。木戸靖弘と申します。一志君のバイト先で知り合いました」

嘘ではない。だが後ろめたい。それでも話しを続ける。

「たまたま好きな小説家と一緒にだとかわかってまして、それ以来親しくさせて頂いております」

「それはお世話になっております」

お世話になつてているのは、どちらかと言うと自分だろう。実際に迷惑を掛けているのも自分だ。一志のバイト先で酔いつぶれて介抱された。その上、自宅にまで泊めて貰った。今日までだって何だかんだと世話を焼かれている気が。もの凄くする。しかし、その事実を伝えるのは矜持が許さない。

「いいえ、とんでもありません」

苦笑しながら頭を下げた。

それにしても一志から聞いていた印象とは大分異なる雰囲気を持った女性だ。これは一体どういう事なのだろうか。一志を見て、しっかりしているだろうとは思っていたが、それ以上にとても理性的な人に見える。そんな人が一志の言うような事をするのだろうか。息子を慰めに宛がうなんて、この人には恐らく出来ないのではないかという気が俺にはする。

「息子にはあまり時間を割いてやれなくて、正直、心苦しく思っております」

真摯な様子にこちらが気後れしてしまう。

「しっかりしてますよ、彼は。自分が同じ歳の頃は、あんなにしつ

かりしていなかったです」

そう話すと鈴さんは顔を曇らせた。

「必要以上に大人びてしまったのは私のせいですから」

その一言で判る。この人は良く見ている。家にいるのに子供を見ない親も多い昨今、目の前の母親はきちんと息子のポイントを見極めて見ているように見えた。だから尚更違和感が募る。

「突然お邪魔したのは」

そこで躊躇いが出る。言わなければ、伝えなければ。でも、目の前の人はどんな気持ちになるだろうかと考えると、何か邪魔をずるように言葉が滞る。視線を手元に落とすと一瞬目を閉じた。

玄関先で雨に濡れた一志が佇んでいた。

寒そうに両腕で自分を抱き込むようにしている。

縋るように俺を見る瞳

この前の話しは有効？

控えめに、小さく、伺うように、一志が同居を口にした夜を思い出すと、何かに背中を押されたようにするりと言葉が出た。

「同居を許可して頂きたい、そのお願いの為です」

驚いたように鈴さんが俺を見る。当然だろう。いきなり過ぎるに決まっている。どう答えが返って来るかは判らないが、俺は説得しないといけない。

見つめてくる鈴さんに負けないように、俺は彼女を見返す。シャーンとしていた鈴さんが、揺らぐように見えた。それは気のせいではなかった。彼女の手が震えている。動揺しているのだろうか。

「それは」

小さく呟く。それから一呼吸を置くと、鈴さんは両手をきつく組み合わせ、目を閉じながら言った。

「一志の意志ですか」

やはり聞かれた。当然だろう。理由を話さなければ納得して貰えない。俺は店内を見回した。一志に触れた人がいるかもしれない。鈴さんも敏感に何かを感じ取ったらしく、向かいの席から俺に問うた。

「もしかして、ここでは話し辛い事でもあるのでしょうか」

表情が険しい。俺が小さく頷くと、鈴さんは席を向かいから隣へと移してきた。それから、恐らく客に接しているように、俺にしないでかかってくる。小声で話しをする為だ。そう判っていても動揺する。

香水と体臭が入り混じった甘ったるい匂いを感じる。媚びるような接触と仕草。本能的に反応したくなるものがあり、俺はたじろいだ。慣れないからというよりは、媚態を自然と感受しようとする自分の身体に驚いている。

一志が家を出たいと言った意味が解った気がした。従業員の女性が一志にしている事は、今、鈴さんが俺にしている事と本質的には同じ。異性に関心を持ちつつも、される行為と目の前の母親が被れば、嫌悪感を抱くのだろうとも思う。それと共に自分にも嫌悪感を感じるのかもしれない。

精神も身体も子供と大人の狭間にいるのだ。不安定で揺れる部分はあるだろう。こと、一志には同性の親がない。これは大きい。異性の母親には話せない事も多い筈だ。

参った。父親の代役か

承知していたつもりだったが、実感し、胸が焼けるように痛い。俺は代役に甘んずる事が出来るのだろうか。いや、胸の痛みはそれが既に不可能だと必死に訴えている。

「こんな体勢で申し訳ありません。でも、これなら周りに聞こえ難くなりますから」

俺にも微かにしか聞き取れないような声で鈴さんが囁いた。着物

の襟から頂が覗く。一志と異なり白く華奢な首。良く似た髪質。それらを無意識に比べる。

手を伸ばたくなるのは一志に似ているからだろうか。それとも異性に対する反応なのだろうか。どちらか自分でも理解が出来ない。

「一志が何を言ったのか教えて頂けないでしょうか」

俯いていて表情は何えないが、声の調子は真剣である。一志の事を想って真剣なのだ。そんな鈴さんには悪いと思うが、俺は濁さずに告げた。

「お店の女性が一志と関係を持っています」

鈴さんの肩が強張る。やはり知らなかったのだ。鈴さんには辛いだろうが、一志が言った言葉も伝えておかないといけないだろう。

「彼女達が一志に言ったそうです　母親である貴女が一志に慰めて貰いなさいと話していたと」

鈴さんの顔が上がる。下から俺を見上げ、苦しげな表情を見せる。その姿はあの夜の一志と綺麗に重なった。縋るような眼差し。どうしていいか判らない、そんな色が見える所も一志と被る。見ている俺が辛いくらいだ。

先程よりも顔色が白く見えるのは、青ざめているからだろうか。この様子から、やはり鈴さんは意識的に一志に店員を宛がうなんて事はしていないと信じられた。

「一志にそう言った人が誰だかは判りません。人恋しさもあつたようですから応じてしまったのでしょう」

鈴さんが顔を背ける。

「鈴さんが、従業員にどんな事を言ったのか、俺には判りません」

一旦区切ってから続きを語る。

「心当たりはありませんか」

聞いておかないといけないと思うから詰問調になってしまふ。攻めているわけでは無いのに、聞いている鈴さんは身を縮めるようにしている。細かい方が震えていた。突然聞かされた事実困惑しているようだ。

「あの時ね」

鈴さんがようやく呟いた言葉は厳しい様子であった。自分に対してなのか、従業員に対してなのかは判断出来かねる。でも、鈴さんははつきいと言っている。

「慰めて貰いなさいと言った事はあるんですね」

言い方が強くなってしまったが、その言葉を鈴さんが従業員に言ったらしい事は判った。

どんな状況でその言葉を言ったのか。それが重要だ。鈴さんが険しい顔で口にする。

「泣いて仕事にならない娘^こがいた。彼女に自分の子供に慰めて貰いなさいと言ったけれど、一志にその役を、しかも違う意味でやらせたんだわ」

ゆらりと影が揺れる。怒っている。静かに怒りを纏うとこんなに怖ろしいのかと思う程に空気が張る。

「先程、彼女達と言ってたかしら」

作り声ではない地声。案外低い。

「恐らく腹いせに私がそう仕向けていると、店の娘や一志に吹聴したのね」

背中が寒くなるような声音。こういった事情だったとは想像していなかった。職場の人間関係が一志に大きな影響を与えているとは鈴さんも思っていなかったのだろう。心中を察する。

「あの」

先程とは打って変わって控えめに俺は声を掛けた。

「その人は今もここにいるんでしょうか」

返事はバツサリと切るような勢いで返って来た。

「いるわけないわ。辞める前の嫌がらせに決まってるでしょ」

最もだ。鈴さんが俺を小馬鹿にしたように俺を見る。

印象　最悪かもしれない。失敗したかも。

不安な考えに取り憑かれる。気になったとはいえ、そこで聞くのは不味かっただろうと、自分に対して小言を言う。言ってしまった後に後悔しても仕方が無いのに。自分でもかなりしょげかえっている気がする。頭が自然と俯く。

くすりと笑う声が出た。そうだ、鈴さんが目の前にいるのだ。うつかりするにも程があるだろう！

「おかしな人」

何がだ？ どこがだ？ 言われた事の意味が解らない。その場で固まるようにして鈴さんと対する。

ふわりと何かが頭に触れた。着物の袂と袖口から覗く白い腕が目の端に入る。頭に鈴さんの掌が乗っている。子供に対するように頭を撫でられたのだった。

「素直過ぎて苦労しそうね」

長谷にも似た事を言われた。傍から見るとそんなに心配される程なのかと自分に疑問を抱く。

「何でここへ来たのかしら」

同居の許可を貰いには鈴さんも解っているのに、そう聞いてくる。何かを試されてる気がした。慎重に考える。

強がっているのに脆い部分が見え隠れする一志。アンバランスで放っておけない。何よりも一志を近くに置きたい。それは何故なのか

ふと浮かんだのは時折見せる幼さが残る表情だった。追い縋るような瞳に宿る淋しさを何とかしてやりたい。そう思うと、俺は呟くように答えていた。

「一志が 泣くからです」

涙は見せなかったが、あの夜の一志は泣きたかったのだと思っている。自分の元に置けば泣かせないとは言いきれない。だが、一人で泣かせたりしなくて済むだろう。結局、俺に出来るのはそれくらいしかないのだ。

「泣くの？ あの子が」

鈴さんが考え込む。何を考えているのだろうか。

リアクションを待つ間の沈黙は不安に拍車が掛るから苦手だ。例え、実際に時間が短くても、無駄に長く感じる。その間に色々と考えてしまう。今も断られたどうしようかという不安と説得する為の言葉を探していた。だから耳に届いた言葉を一瞬疑った。

「連れてお行きなさい」

どうしたらこの流れで許可が下りるのかと思うくらいに、すんなりと鈴さんは答えた。

「いいんでしょうか 本当に？」

答えが信じられずに、おずおずと問う。鈴さんが晴れやかに笑う。

「一志の判断です。止めません」

会ったばかりの男に、こんなにあっさり託す事が出来るのか。たった今まで息子を想って憤っていたのに。

「あの、俺のこと信用してしまつて、本当にいいんですか？」

自分が不利になるのは判っているが、こう簡単に許可が出ると疑いたくなってしまう。それが表情に出たのか、鈴さんが困ったように眉を寄せた。

「本当に素直な方ね」

やや呆れたように溜息を吐かれる。

「貴方を百パーセント信用したわけではないのだけれど、託してみても一志の為には悪くない。そう思えたの」

そう言つてから鈴さんは徐に俺の右手を握った。思わず身を引く。握った手を自分の額に両手で掲げるようにして鈴さんは告げた。

「貴方はあの子が弱みを見せる事が出来る相手です。今だってあの子の為に何をしたらいいか必死で考えていたでしょう？」

何と言えばいいのだろう。何も答えられずに俺は俯くしかなかった。

「それに、貴方の申し出を受けるのは、あの子に慰めを強いる娘を近付けないようにする一番いい方法だわ」

これにも何と答えていいか判らなかつた。一志の為を想つてはい

るが、純粹な動機は後ろめたい程に利己的だ。眞実を知つたら、鈴さんは決して同居を許可しないだろう。そんな本心を隠し、俺はぎこちなく笑つた。笑顔に違和感が無いようにと願いながら。

「後は一志の口から聞きます」

鈴さんは話しを切り上げるようきっぱりと宣言し、俺の手を離した。

「お店もこれから忙しくなる時間帯です。日程調整は一志として下さい」

「え、いや」

鈴さんが椅子から立ち上がりぎわ、俺の言葉を制すように言った。「お店の前で財布の中身を気にしているようでは、この店の客として相応しくはありません」

一刀両断といった台詞に打ちのめされる。あの時点でお見通しだったのかと思うと顔から火が出そうだ。

店を出るように促す鈴さんに、一つだけ伝えたい事があり、俺は鈴さんの袖を引いた。

「あの、一志には俺が鈴さんに何を話したかつて言わないで下さい。自分で彼に伝えます」

「私は同居に許可を出したとだけ話せばいいんですね」

鈴さんの言葉に俺は大きく頷いた。それを見て俺はようやく肩の力が抜けた気がした。

立ち上がり鈴さんの前に立ち入り口へと向かう。

「一志を宜しくお願い致します」

店先で深々と頭を下げられ、とんでもないと両手を振つた。そんな俺を、鈴さんは穏やかな笑顔で見送ってくれた。

店を後にし、あれで良かったのだろうか、歩きながら思い返す。己に自身が無いから一つ一つ確認するように再生する。その中のある言葉を思い出し、俺は思わず立ち止つた。

一志が 泣くからです

「何だ、あの台詞は」

あの時は真剣だったので気が付かなかったが、かなり赤面ものだ。今更だが、恥ずかしさのあまり死にそうな気分になった。顔が熱を帯びる。夜の帳が顔色を隠してくれているのが幸이었다。そうではなければ道を歩くのが難しい程だったろう。

scene・6 (後書き)

爽やかな9月の朝でした。あまり眠れず、いつもに増してボンヤリとした頭でPCを立ち上げ、20分ばかり原稿に修正を入れておりました。最後の最後で大ポ力をやらかし、一気に目が覚めました。

「ああああああ!!!!! デ、データがあ!!!!!!」

保存の種類を選び間違え、上書きされたものには文章が一切残っていませんでした(T|T)

出勤前に頭真っ白。マジ泣きしそうな朝の出来事。

ということとで、書き直し&ショックで10日ばかり進行させる事が出来なかったです。ただでさえ、かなり恥ずかしい内容を自覚してしまい、キャラの心境に戻れなかったというのに!

続きを待つていらした方々には申し訳ありませんでした。投稿原稿頑張る! って休んでたのに輪をかけて遅くなってしまいました。

投稿の方は納得するまで書いてから投稿先を選ぶように変更しました。こちらも並行して進めたいと思っておりますので、今後めちゃペースが開く場合があると思います。

内容に関してですが、思いつきり描写に興味が入っています。印伝革だの手水鉢だの銘仙だのと、結構無謀な設定のお店になっちゃいました。こんなあるかい! って感じです。用語説明は一切省いているので、判らないということでしたらご一報願います。

「君影草」鈴蘭「木戸つち、何気に君影草をネットで調べています。演歌の曲でも君影草というのがあるので、恐らく、それを聞いて路地裏の昼カラをやってるスナックやパブを想像したんでしょう。ギャップが大きくて尻込みするもの当然ですな。」

ちなみに本文の女性は『一夜』の小百合さんではありません。彼女はあくまでも一志の初めてのお相手で、その後の女性が腹いせで一志に手を出してるという設定です。

よつやくお母様の許可も出たことで、一緒に暮らし始める二人ですが、この調子だと仲が進展するのかわかりません。

……長い目で見てやって下さいませ (^_^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1580o/>

Wicked Heart

2011年9月26日03時11分発行